64
237

始

10 p 92
正巽書房

坂本龍馬關係文書　第一

大正
15. 6. 28
購求

坂本龍馬關係文書第一正誤

（系圖一）本文一頁　濱武彌右衛門正勝ハ濱武孫右衛門正勝ノ誤

10 p 92

64-237

坂本龍馬關係文書第二

目次

一坂本龍馬手帳摘要　一頁
一雄魂姓名錄　一五
一海援隊日史　八一
一海援隊商事秘記　九三
一三吉愼藏日記抄　一〇三
一木戸孝允覺書　一一九
一いろは丸航海日記　一四一
一坂本龍馬海援隊始末　一八一

目次

一薩長同盟實歷談　二九九
一坂本中岡兩君と薩長同盟に就て　三一三
一坂本中岡遭難一件　三四五
一坂本中岡兩雄の兇變　三五一
一坂本と中岡の死　三五七
一坂本中岡暗殺事件　四七三
一金子才吉事蹟　五〇一

坂本龍馬手帳摘要

此手帳ハ小キ普通ノ横卷ニテ坂本直氏之藏本ナルヲ借覽セリ然ルニ龍馬氏之心覺ヘニ止マル略記草々ノ揮毫ニテ字体モ難辨程ノ物も有之卷首ト考ヘ披見スレハ倒マニナル處アリ又取直シテ卷尾ヲ卷首トシテ見レハ可讀處アリ二冊とも過半ハ白紙年支日月アルモアリ又總テナキアリ縱横亂寫眞ニ磊々落々ノ性今尙昔日相見ル之感アリ其内ニ付テ引用トモ成ルベク又讀メル者ヲ寫シ置ク如左

帝國圖書館藏

ノガ
壬丑歲　慶應元年

四月廿五日坂ヲ發ス

五月朔鹿府ニ至ル

五月十六日鹿府ヲ發ス時午ヲ過ク鹿兒ヨリ四里伊集院四里

市來港止宿四り川内(センダイ)宿二り

十七日

川内川アリ海邊迄三里計ト云然ニ海船ヲ入ル水深シ大川泊二り

阿久根宿二り

十八日

野田二り半

此邊野田島町皆地(本ノマヽ)差士也泉米津までの間平原然ニ水少シ物多シハセノ木多シ

泉米津

右下(地本ノ書体)直右衞門と云もの右町役人也部當(ヘットウ)と云旅人人馬斷所々の世話ヲナスものなり後日野間原泉口番所ニ至リテ直右衞門ニ書テ與ヘハ必ス急キ罷出ル筈ナリ

十九日朝肥後ニ入ル

右泉口米津ゟ乘船

廿三日宰府ニ至ル澀谷彦助ニ會ス

廿四日傳法(轉カ)ニ謁ス

小田村ニ會ス

廿七日又謁ス

廿八日宰府ヲ發ス

二り山家宿(止宿三り)

廿九日

三り内野三り

飯塚五り大川アリ

木屋之瀨宿(止り二り)

朔日

黑崎平町乘船赤間間(關カ)ニ至ル西の端町入江和作ヲ尋但小田村ノ示ニヨル

城ノ腰綿屋彌兵衞ニ宿ス（但シ官ノ差宿也）

二日

曾病アリ依テ養生ノ爲宿ヲ外濱町村屋清藏ニ取（不讀）□□醫ヲ撰ンテ長府かな
や町多原某を求不日ニ平癒スト期一七日トス

四日此日一夷舶アリ馬關ニ泊ス

五日長府時田重次郎馬上ゟ來ル

六日

桂小五郎山口ゟ來ル

七日

船腹ニ横ニ白色ノ蛇腹アリ砲門ノ如ク見ユル十日英船大サ順動丸ノ如シ
スコールステヱン二ツ
ラット
ラアトルカストの色黄白ニ見ユル

西大寺ノ前西南ノ地方ニヨリ泊ス賣買船也然ニ上陸ノ者四人アリ皆劍
ヲ帶ヒ士官ト見ユル

夜ニ入椋梨傳八郎來ル

〔同卷ヲ倒ニシテ卷首ヨリノ中程ニ突然ト左ノ數行アリ〕

廿三日　將軍坂ニ下ル（廿三日ハ乙丑ノ九月ナリ○校正者識）

廿四日夜　大坂ニ下ル

廿五日

廿六日　兵庫

廿七日

廿八日　豫州青島泊

廿九日　上關

十月

三日カ　宮市

別卷

丙寅正月大　慶應二年

十日　下ヲ發

十七日　神戸

十八日　大坂

十九日　伏見

廿日　二本松

廿二日　木圭小西三氏會

廿三日夜　伏水ニ下ル二時過ル頃 本ノマヽ

廿四日朝　邸ニ入ル

卅日　夜京邸ニ入ル

二月小

廿九日夜　伏水邸ニ下リ乘船

三月朔日　大坂

四日　三邦丸ニ乘組

五日　朝出帆ス

六日夕　下ノ關ニ泊ス

八日　長崎ニ至ル

十日　鹿兒府ニ至ル

十六日　大隅霧島山ノ方溫泉ニ行鹿兒ノ東北七里計ノ地濱ノ市ニ至ル

但し以舟ス夫ヨリ日高山ニ至ル

十七日　シヲヒタシ溫泉ニ至ル

廿八日　霧島山ニ發ス溫泉所ニ泊ス

廿九日　霧島山山上ニ至ル夫ヨリ霧島ノ宮ニ宿ス

卅日　溫泉所ニ歸リ

四月大　シヲヒタシ溫泉所ニ歸ル

八日　日當山ニ歸ル

十一日　濱ノ市ニ歸ル

十二日　濱市ヨリ上舟鹿兒ニ歸ル

十四日　改正所ニ至ル

五月朔日　櫻島丸來ル

廿九日

四兩三歩　金

右寺内氏ヨリ借用セリ

又貳兩寺内ヨリ

右短刀合口コシラヘ幷研

備前兼元無銘刀研代

合テ三兩二朱余拂フ

六月朔　櫻艦ニ乘組

是ヨリ先キ廿九日兩氏ヲ問時ニ西曰近日西客來ル其時件ニ付テハ曾テ木桂ヨリ來書アリ其儀ニ曰ク兩國論ヲ合テ云々ト故ニ此國ニ來ラハ先ツ其事件云々ヲ委曲使ヲ以達可ク然ラサレハ其西客ニ一名ヲ付テ送ルヘシト

船買主與三郎

請人　小曾根英四郎

周旋　多賀ナリ

廿二日　フロイセン商人チヨルチーニ面會ス船買入及商法ヲ談ス

廿三日　船見分此日夷人ヨリモ奉行ヘ引合邸留守居ヘ談ス

廿四日　朝邸留守居ハ行但留守居ハ汾陽五郎右門也

廿五日　朝五時頃吳半三郎亞商と取替ユル證文案紙成ル

六日　◎二十六日ノ誤カ

廿七日

廿八日　船受取

三兩二歩也

坂本龍馬　寺内新右門衛脫カ　多賀松太郎　菅野覺兵衛　白峯駿馬

陸奥元次郎　關雄之助

右ハ當月何月分慥ニ頂戴仕候以上

寅何月何日

關雄之助印

印鑑○關雄之助

右ハ印鑑を以て坂寺多賀菅白陸關七人之分毎月三日壹人當三兩貳歩宛頂戴仕候以上

寅十月三日

大洲イロハ丸

船將　國島六左衛門

○風藥　カミルレ大　接花中　磚砂トチシヤ

〔倒ニシテ卷首ヨリ如左二册トモ參考ニ用ナキ一時ノ心覺樣ノ者多シ此ニ其一類ヲ寫シテ寄稿ノ念ナカラシム

貞觀政要　大宗曰忠良有異乎魏徵曰良臣使身獲美名君受顯號子孫傳世云

々

齊明天皇六年　始造漏刻

卒報猶如急變

非子　賤虛名貴實田破浮淫督耕戰明賞罰營富强

○術數有餘而至誠不足

上杉氏之身ヲ亡ス所以ナリ

丙寅五月二日ワイルウエフ破船五島鹽屋崎ニ於テ死者十二人

船將　黑木小太郎

士官　池　藏太

水夫頭　虎吉

熊吉

水夫　淺吉

德次郎

仲次郎

勇藏

常吉

貞次郎

加藏

〆十二人

生殘者三人

下等士官　浦田運次郎

水夫　一太郎

三平

〆三人

右死セル者朝曉ヨリ日出ニ至リテツクス

浦田運次郎

水夫一太郎

幾太郎

殘ス分（兒島ニか）　友吉

安吉
火焚　新助

以上草々ノ略記都テ後日結寫文飾ヲ加ル者ニ勝リ其眞卒ナル當日ノ眞ヲ見ルニ足ル故ニ寫置

土方直行記

雄魂姓名錄

中川修理大夫
小河彌右衞門
田近陽一郎
樋口勝之助
森　玉彦
渡邊彦左衞門
田部　龍作
廣瀨友之允
福原武三郎
矢野勘三郎

中川式部家來

宇野關造

野溝甚四郎

赤坐彌太郎

堀

夏月惇平

安野藤二郎

高野直右衛門

高崎善右衛門

播赤

森　美作守内

木村寅治

田川運吉

山本隆也

濱田豐吉

青木彦四郎

西川邦治

高村廣吉

吉田惣平

八木源左衛門

西川升吉

松本善治

松村茂平

山下鋭三郎

家老　森主税

用人　村上眞助

細川家來

轟武兵衛

住江甚兵衛

山田十郎

佐々淳次郎

宮部鼎藏

河上彦齋

濃人ニ而京師住所紀州爲藩ト眞カ家里直太郎。

大久保越中守

勝麟太郎

早起結髮自江府先生之翰來ル内有新聞紙

暎國千八百六十三年第八月廿一日横港增新聞日本七月八日

暎國軍艦コロモラント書狀を得て當港ニ只今著セリ右船鹿兒嶋ニ在ル同國軍艦ニ逢ひ次ノ新聞を持來リ去ル土曜日本七月二日第十二時午時軍艦鹿兒嶋之港ニ碇泊シ在て大風吹ク日本人ヨリ打出セリ不幸ニシテ次ノ人コロサル

カピタン船將ショスリング人名

コンマントル大將ウヰルモツト人名

右兩人一ノ彈丸ニ打殺サル手負死人六十人船々多少損傷

惣軍艦當港ニ歸り來ル近きニアリ書中ノ文巨細ニ記スルヲ得ズ唯其大略ヲ載スルノミ

當十五日第二時臺場ヨリ打出ス水師提督直ニ合圖ヲ成ス

日本船ヲ燒ク事三雙捻仕懸蒸氣也

船號エゲラント　シルレオルジクレー　コンテスト右ハ横濱又ハ長崎ニテ買入タル船也　傍ニ碇泊シアリシ也

臺場ゟ打懸クルヲ以テ軍艦碇を上ケ臺場ヨリ五百乃至六百ヤルト（一ヤルトハ三尺三寸）余離れゟ一列ニ連レリ臺場ヨリ射タル事甚ダ強ク殊ニ大サ十インチ。八寸三歩也ノ破裂丸又ハ三十二斤（ホント）の玉二十四斤の實丸也

カピタン並ニコンマントルハ午後第二時五分五厘頃甲板ノ橋上（船ノ高キ所也）ニて彈丸ノ爲ニ卽死ス又十インチノ破裂丸甲板ノ中央ニゟ破裂シ水夫七人卽死シ手負ふもの水夫五人ロイテヤント（船將也）一人譯者曰但右ハユライリス（船號）ノ事也

天氣烈シク雨降リ風陸ニ向テ吹ク

午後第三時火府中ニ起ル第三時二十分ニ發砲止ム

第七時十五分ニ小軍艦ハワアッケ五雙ノ琉球形之船を燒ケリ第九時二十分ニ造作場ニ打懸タルヿ終夜

第八月十六日（七月三日）午後第三時三十分ニ（碇カ）破を上ケ蒸氣ニゟ港口ニ出カけ府臺場ニ向ケ打テ（尺破裂丸又ハ實丸）唯答は二ヶ所ノミ破泊セル所ハ臺場ヨリ丸ノ達せざる所也譯者曰コハ貳度目ニカヽリタル所也

手負人目祿（マヽ）

船號

ユライリス　手負廿一人内一人死　内ベール死人七人　内一人士官

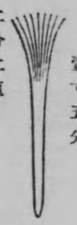
同　同　アルゴス　手負三人　コッケット死人一人（手負六人内一人ロイニート死人）

同　同　ヘルシウス　死人一人手負二人　ライスホース　手負二人

同　ハワアック死人手負無之

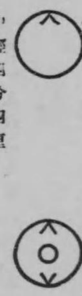
○

又ハ壹寸八分八厘
壹寸五分



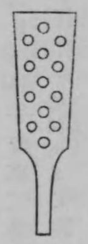
二分二厘

此ノウスキ　赤金ニテ制ス



中經四分四厘

ロノ經迄荒きコナシ藥をカタクナク又ハヤハラカニナキ樣ニ一ツツム



荒シ藥ヲツメテ赤金ノ板ヲヲキドンドロ白土此ハビンノコ此二品ヲヲキウス

キ紙ニテ、バリ又一マイ赤金ヲヲキ上ヲ、バリ、ロ、キ、ノ所ヘチヤンをぬるへし

ドンドロ制

水銀一匁也　硝酸九匁　酒精十一匁

硝石制

綠礬　三百目　硝石　百目

○

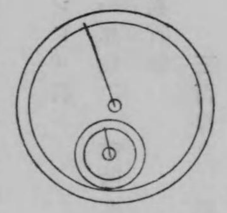
○兵士三人ヲ以テ碌多ト號ス○十六三ニ編集スルヲ設幾丁ト號ス○二設幾丁ヲ合併スルヲ百羅屯トス○二百羅屯ヲ合集スルヲ細比支ト號ス○細比支ヲ合集スルヲ拔隊龍ト號ス二拔隊龍ヲ合スルヲ列細綿多ト名ク此數一千五百三十六人也

○

大和高取植村駿河守殿ゟ今朝未明可尾如來寺土佐町西裏手へ凡千人程罷

越し候而大筒其外鐵炮打立候ニ付先方人數逃去候也今朝明六ツ時一番首
遠山權藏夫々追々討取候首幷ニ落道具左之通荒まし
大筒九丁　鐵炮十三丁　鎗數不相知竹鎗不知
菊の御紋　丁ちん不數相知
生捕人　七人　討取首　九ツ
八月六日夜

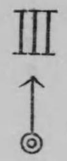
○



セコンド秒
ミユート分下ミユート六十秒上
コール時ミユート六十シテコールト云
セコンド一周スレバミニユート一分ミニユー
ト一周スレバコール一時コール一周スレバ十
二時二周スレバ一晝夜

一晝夜ハ二十四時
ミニユート」ハ六十秒
コール」ハ三千六百秒

一番長キチミニユート云也分チウツ者



此チコールト云則時チウツ者也中ノハリ

此チセコンド」ト云則秒チシテ廻ル者也但一番ミヂカハリ小丸ノフチノ方ニ付キ有ル也

○

錦花

一エンショウ　百五十目
一ケイクワン　二十五匁

一ナスビ　三匁
紫光星
一ヱ　百五十目
一ナスビ　三匁
日
一ヱ　十匁
一シヨヲ　一匁
月
一ヱ　十匁
一イ　四匁五分
青火
一合藥　十五匁
白星
一アサギ　三匁
一ショウユン　五十目
一龍ノヲ　五匁
一イ　四匁五分
一スミ　五分
一ジョヲ　五分
一トタン　二十目

一ヱ　十匁
一スミ　三分
金光星
一ヱ　三十目
一松ヤ子　十六匁
金銀花
一ヱ　八匁
一イ　三匁
火道
一ヱ　七匁
一イ　二匁
銘シ牡丹
一ヱ　七匁五
一イ　四匁
一ショヲ　六分
一イ　八匁五
一灰　九匁
一灰　二匁
一鐵　十二匁
一灰　二匁五
一灰　二匁

一イ　六匁　一鐵　二匁五
花簾
一ヱ　十匁　一水　一匁五
一イ　三匁五
藤花
一ヱ　十匁　一イ　三匁
一ハ　七匁　一小風（チトノマ）　七匁
万天白
一ヱ　三十目　一イ　十二匁
一ハ　壹匁二　一松　三匁
亞鉛ホイス法
一トタン　二十目　一鉛　百目
一錫　四十目

青星（エン）　十匁　四匁（イ）　七分（キハ）　十五匁（トタン）
青星（エ）　十匁　四匁（イ）　二匁（ハ）　小エン七分　十匁（トタン）
螢
一イ　二匁五分　一ヱ　十匁
一ハイスミ　四分
同
一ヱ　十匁　一イ　三匁
一ハス　七分
同
一ヱ　十匁　一イ　八匁
一ハ　五分
○
○蝦夷幷ニ北蝦廻路用意ノ道具

伊勢　　松浦竹四郎

先生は林士(子カ)平ぬしの志を次き蝦夷地廻覽ス

一裝束は伴天股引下著綿腹宜羽織なし笠三尺帶桐油草鞋は腰につく

但し夜具不用故に綿入一枚ッヽ自分用意すへし

一茶碗一ッ箸一膳銘々懐中すへし杖は勝手次第たるへし

一蠟燭竹火繩樺(カバ)附木火口用意之事

一小鍋三ッ藥鑵一ッ用意すへし

一鉈三本細繩挑灯等は源太夫持參之事

一源太夫事手文庫程之柳行李一ッ持參鍼盤(ジシヤク)量尺紙筆等此内意之事

一矢立手拭火打扇子足袋藥等銘々用意之事

○

茶ヘタンバンヲ入ルレバ則スミトヘンず

○

壅敝(ヨウヘイ)

○

古今武家盛衰記　面白き本也全本也

○

大君のうきを我身にくらふれハ旅寢の袖(ソデ)の露はものかわ　　兒嶋强助

梓弓岩をもとふすこゝろもて增良武雄のおもひたゆむな　　强助の母增子

すめらきに身はさゝけんと思へ共世にかひなきはおみななりけり　　兒嶋强助

花咲ん春を妨く醜草の根よりそ先にかるへかりけり　　同人妻操子

別れてはまたおふ事もかた絲のよるへなきミの果そかなしき

國の爲盡す我夫の眞心をいかに此の身のあたにはつへき
　　しゝと九郎衞

人は死ぬ時死されハ死ぬるニまさる耻ありと世の諺もよそならすせまる
我身を如何せん
　　廣田精一郎

　　執中

增荒雄か思ひ立田のこき紅葉赤き心そ知る人そしる
君と親ニ別れ木曾路の旅枕夢より外ニおふよしもなし
　　久板玄瑞

千早振人の醜草かゝるかと思へは我の髮さかたちぬ
なき玉は長門の國になからへて世を思ふ君のかけに立はや
　　河村能登守

　　牧和泉守

大山の岸の岩根にむめにけり我年月の日本魂

○

長年の末代までも龜鑑と仕れと宸筆の御文及ひ御歌を給ふ

　　湊

漫々たる海上にいつくともなくたゝよひて四日はかりはすきぬ二十七日之夕方ニや杵築の浦ニて西風烈敷明ていかなるへきにかも心騷きせしかとも風にまかせしに夜より波の上も靜にて明ぬれはこゝかしこも見ゆるに伯耆の湊に著ぬ楫取も今は力盡ぬと云ふをとかくして大坂と云ふ處ニ著ぬこゝはあら磯にて釣船たにもまれなりこの處の主しといふものも都にありけれはよしあしニつけてことふへきものもなしともなる人ひとりふたりはなを人もとめとて出ぬ楫取もにけうせぬれはあやしき苫の下にたゝひとりうつもれいたる心の中いわんかたなし直衣なんと引つくろひ今は限りと待居たる船のともに人ひとりきたりあら〳〵しくもなきはい

かなるにやとあやしきに忠顯を尋ねて御迎のよしを奏す嬉しなとはかゝるためしをそいふへかんめる中々其時は心も及ふへき限りにあらす思ひ出る度毎に其きみなをむねにあり忠をいたす輩いつれもおろそかなるへきにはあらねともさしあたりて待出たりしこゝ地なんたとふへきかたぞなかりし

○

宰府に在テ　三條實美卿

大君は如何在すと仰き見れは高天原そ霞籠めたる　十首

玉の緒は憂世の蘆と消ぬとも君ニ被知婆うれしからまし

○

豐人橋東

扇屋與平

同所　扇屋清三郎

今橋堺筋　堺屋庄助

船町　加嶋屋作五郎

堂嶋住人ノ菊屋次平といふ人より申込む所也

扇屋方ゟハ天摩の住人稲奈利の神職より申込む

堺屋方ゟハ小野川といふ人より申込む右三口共近江屋宇助ノ周旋也

○

一ヶ年ノつもり覺并米壹石十兩相場ニ而

一十人扶持ノ米十八石其ノ（并ニ一ヶ年也

代金百八十兩

一壹萬兩の利足七百兩

六ヶ月付

壹萬兩處利分扶持共五百十兩ニ而皆すみ

○

下し藥マヅ　三分より五分迄而

ヤーラッパ

○

玉琴のひくてあまたの浮れ女に誠有りと心を盡す人こそあられ(波カ)にも又おかしすへて男ほとあさましき者は有らしと我のミ思ふかもしらすいにしの佛刀自靜なんと申となしとはいわんもやぼらしき事あだしの露きえなん命吾もしらす人もしらすあそバヽあそへ西へ東へいくたりの目にし心ニほす糸櫻

貝原氏へまいる

○國史略

○三月北條高時、餘黨本間某澁谷某叛、襲鎌倉相模、守足利直義討平之○夏出雲守護鹽谷高貞進千里馬　帝時宴弓場殿使善騎者調之驅驟如神帝問侍臣曰龍馬、出爲瑞爲妖侍臣妄奏諛辭　帝大悅藤房正色奏曰臣聞明主所瑞者人才奇異之物非所瑞矣在昔周穆八駿西巡徐戎叛亂漢文及光武時俱進千里馬二君不受蓋天子之出鹵簿儀衛自有程式千里馬非所用矣若夫兵火騷擾之際羽檄飛捷尙或藉斯物方今新經喪亂戶口凋衰有功之士褒賞未遍歸順之人危疑未安方適憂勞撫育與天下更始休息之時龍馬非所用矣臣願宜少賜高貞物附龍馬却遣使海內之人知陛下所瑞者人才龍馬非所瑞矣　帝默然罷宴藤房爲人精忠卓識與風韻之美秀出群臣之上數言政事得失不聽後遂棄官而去不知所終

○

卯ノ
○二月二十九日瀬野尾之印艦之事七日を以ゐ太夫幷ニ愛甲迄ゐ申入れ候處此之義は大難也雖別段盡力して廷の力を以ゐ申附候樣之手段ニ致候樣申候則其夜大久保内田參り否之義ハ二十九日ニ聞し處もしまちがい候時は廷ニ於ゐ拂方致ねばならぬ故其口ハ先やめニして今三四十日ほどまちくれなバ家敷ゟ一萬ハ用立候と申故只今急難以申達候故此つもごりニ小拂を致ねバ御家敷一萬借用致候ても益ニハ相成不申候とおして申遣し候處大久保内田之兩人小細を聞取最成義どふぞ明日中相まちくれ候樣申候故まつ處也終始愛甲取次也

卯ノ
○三月四日小松太夫之　有て思ふハ今時之役共は皆小兒也と思ふ故ハ本城之要害ハ名將之論ずる所にあらるに衆人只要害をいふ要害ハ敵國ノ堺目め又敵國へ出張り候時論也本城之要害をいふ人ハ敢テ顧ニ足ず是等ハ能心得心有人に論ずへからずと思ふ

吾等要害ハ仁德義三ッこそかねての要害也
戰之勝まけハ平日民愛み士をあいする外ハなし此こそ要害の最大也敵國へ出張之上ハ少く論して可也

○三月七日陸奥山本之衆るい大垣家人神戸或ハ近文福地松葉屋豐仁其外小成ル者共迄ゐ山如く成りて日々夜々爭論と聞く既ニ三日もつゝきたる樣子也吾ハ大久保内田小松太夫ニせまる此義近江之商人より壹萬金備取約條ニゐ印艦之一條ニ成りし所大久保内田之重役より此事精大なさん事を思ふ故西郷をして御國元ゟやりしといふ吾いふ。○二月つもごりまで請取金なれハ今三十日延がたし右印艦先々商法迄ゐ吾死を以ちかひし故也士農耕商ハ皆大小之愛情道に有て吾此の事を手廣くなせしも皆商人の手を以ゐ也今壹萬銀を三十日間延引仕なバ家を失ひ食立者二三人有りといふ大久保内田の輩曰家敷よび吾等より申聞ケ候ニ依ゐは承引異拜ハ有間敷くいふ吾又いふ商人金銀ニ依苦心をもとくる者なれ只口上にてハ淳輔

ニなんぞかわらん情ニはなれなは三十日先にて壹萬金を得共一向益無き事萬國ニ大小之政をとり其得失正し其邪正分ち兵亂生といへども此皆君民情をそこない士民不和と成ル處の間より戰い生すと大に義論なしけれバ大久保内田小松の輩も皆道理成とて一重に力盡しくれ吾思ふ薩能士あいし能民を愛し仁德義を以旨とし故右輩之有ける内ハ國必强し故砲臺築城よりも要害けんごなる仁德義色少し見ゆる故也

其他國ハいふまじ人とハいふまじ此ノ日嵐山へ三役ゆきけり只吾家有りて歸廷をまつ已ミ此日聞關太郎成人三四日前き江戸より來りて曰熊谷といふ所浪士三千計屯し夜々江戸町々やく此にてハ遂ニハ城も危しといふ彼等の輩も京攝之時情能知れしと聞案するに京落中に二三十人之者有りて江戸へ情通す里○二○眞祭○之宅ニ有而公家之方にまで義論すゆへに義論强き方々共有しと也事ハ不書

○

同八日太夫勢州より大和ニ趣くと聞愛甲ハ別行と聞此故や未明知

同九日朝大久保氏ニゆき衆之難を談しかの壹萬金のまちがいハ吾聞きあやまりと決す然共今三十日の處ハ吾等有難く思へども商人またず故ハ吾等商人の爲に商法手廣く成ル尤其量々を見て器に合たる者を指圖すといへども今早其義も不成事やむに極ちかし吾ながら心決したる上ハつよき事ハばんじやくの如し故今日より吾其罪をまつ已之後ハ白峰陸奥山本之三友大に盡力す笑しくも又心殘り也呼嗚天然成哉々々々々一婦を捨て一ちらをすてる之時成りしか笑止千萬也吾身ながらきのどくにぞ思ふ

○

御前ニテ左樣ニとのふ

「錢一疋　一貫也

○

二月廿四日七ッ時土佐ノ人廿有人切腹ノ節役人共へ申出ル件

一人數所置ノ件
一カイシヤク人ノヿ
一隊中へ申聞ノヿ
一速ニ異人應接ノヿ
一殘リ人數ノヿ
一君上御わびのヿ
一死體ノヿ
一類ぞく立合ノヿ
一堺近邊へ墓所ノヿ
一神葬ノヿ
一石ヒノヿ
一妻子ノヿ
家督ノヿハ急々詮儀シテ
君上御じきに御書面ヲ御差しつかわしのヿ

一此度ノ始末ヲ御國内へ速ニ御布告ノヿ

○

四

拔隊龍後面向（バタイロンレクツオムケールト）
已ゝノ馬の方進（ブール、ユーウエ、バールテンマルス）

○

長崎東濱町
財津屋安次郎
大坂西堀ニ齊藤町
濱長崎飛脚
中筋屋藤之助
大和屋林藏

三

高擧刀(ホーグサーベル

擔ヘ刀(ダラーグトサーベル

納メ刀(ステーク、オツブサーベル

整齋本(ソロヘタツア)輒(リクトテウゲルス

唯備爲(馬ゟ下リテ戰隊ヲ制セヨ

下乘(オリイ)(スチーグアフ

組ニ整(トノヘフクセ)復(ヘルステルデルリンエン

徒步シテ戰隊ヘ(デ、フート、イン、バタイレ

至四

(二)

右方整頓(レクツリヲクトユー

立定(スタート

氣著(ゲーフトアクト

査照筒(ギンモ)(インスペクチー「ハン」ヘツトゲウエールル

氣著)(ゲーフトアクト、オム、

裝俑(コメ)テ、ラーデン

又コメーハ(ラードト共言

後列閉チ(ゲレーデレンスロイトユー

前後列鄕導官初メ拔ケ佩刀(テレツキトオイトサーベル

至三

氣著ケ(ゲーフトアクト

右方橫步(レクツ、ブーフル、シケンケルト

行進　(マルス

右方整頓(メツト、エー子ンーレクツーリクトユー

左方整頓(メツトエー子ンリンクスリクトユー

整齊へ本輦（ソロ リクトデ ウゲルス）
右方二列ニ（レクツリイン、テウェ ー、ゲレーデレン）
行進　（マルス）
左方一列ニ（ソンクスリイン、エーン、ゲリツト）
斜メ左方（スコインスリンクス）
行進　（マルス）
駢合左轉廻（メツト、ヒーレン、リンクスオム）
行進　（マルス）
前面方へ（ホールリウアール ツ）
郷導友右方（ゴイデレクツ）
靜定　（ハルト）
右方へ又左方へ（レクツ、オフリン クスリクトユー）
立定　（スタート）

後列後ニ組開（ゲレーデレンリアルルウア ール ツ、オトベント、ユー）

〔一〕

○

五月十六日與弟正季子正行等辭闕而西至櫻井驛正行時年十一矣正成遣歸之河内誡之曰汝雖幼已過十歳猶能記吾言今日之役天下安危所決（ケツ）意吾不復見汝也汝聞吾已戰死矣則天下盡歸足利氏可知也慎勿計較禍福嚮利忘義以廢乃父之忠苟使我之族隷而有一人存者則率以守金剛山舊趾以身殉國有死無他汝所以報我莫大於此因以天皇所嘗賜寶刀援之訣別正行請從共死正成叱之起正行揮涕而去正成乃至兵庫

○　宗光（ムシ）　長友　清行（チ）　義澄（セ）
直柔（スス）　孝義　純正（今）　御楯（サ）

十六ペンインフ也
一ストイフルハ

1元ハ　二十ストイフル也

z	Z	Z	セット	y	Y	Y	エト	x	X	X	エックス	w	W	W	ドブルドイフ	v	V	V	エフアー	u	U	U	ユー	t	T	T	ト	s	S	S	エス	r	R	R	エラ

q	Q	Q	キアー	p	P	P	ペ	o	O	O	ヲ	n	N	N	エン	m	M	M	エル	l	L	L	エル	k	K	K	カ	j	J	J	イ、	i	I	I	イ

h	H	H	ハー	g	G	G	グ	f	F	F	エフ	e	E	E	エ	d	D	D	デ	c	C	C	セ	b	B	B	ベ	a	A	A	ア

○

一	1	エイン	
二	2	ナエー	
三	3	デリー	
四	4	ヒール	
五	5	ヘイフ	
六	6	セス	
七	7	ヘイフ	
八	8	アクト	
九	9	ホーガン	
零	0	ニュル	

4:16 = 1:4

13:26 = 1:2

（●　●　此ノ印ハ零也

＋　加よせ　×　乘カけ

—　減ヒキ　÷　除ハセリ

|、、、、、、、、、、、、、

a（アル）　b（ベ）　c（セ）　d（デ）　此ノジハ某數ノカリノモジトスル

少年（ヨングメン）。嬶婦（ブライド）。處女（ギリル）　惡（ベッド）　善（グード）　僧（プリースト。トウンスメン）　町人（ハント）　心　面（フェース）

口（モート）　金（テスティクル）　丸（ゴール）　贈（ロフボージュン）　媚藥（ホレクスリ）

○楠公櫻井赴策合

足利尊氏留太宰府踰月衆或謂乘勢急入京師或謂待秋熟議未決會赤松則村遣其子則祐來告尊氏曰義貞兵攻分備前備中播磨美作諸城久不能下師老糧竭聞將軍至必望風潰走今白旗受圍數旬城中兵食乏罄破在旦夕若白旗失守則諸城不出三日皆陷中國衝要委爲敵有將軍雖有百萬衆莫所用之於是尊氏大擧東上五月朔至嚴島初尊敗奔兵庫熊野道有者在軍中與廢皇臣僚相識尊氏召而謂之曰吾之數敗非戰之罪也以吾負賊名焉爾吾始欲擁立一皇胤以其悉在叡山不可如何吾意廢皇抑薦不得志久矣汝安爲我得其詔旨吾將使兩皇爭位（綸）以成吾事也道有諾而去至是會僧賢俊奉廢皇詔書而至尊氏大悅令諸將立將旗於是遠近競附軍氣益振尊氏以少貳頼尙策分兵數萬爲陸軍令直義將之自將舟師戰艦數千水陸並進新田義貞聞之曰卽扞陸者則海者直犯闕矣吾欲退屯兵庫合捍海陸於是釋白旗圍召諸將還退軍兵庫兵逃者過半飛書告急朝廷震動時源顯家已歸鎭京師兵寡天皇命楠正成往援義貞正成奏曰尊氏新

擧九國而來其鋒甚銳我以疲兵格鬪無他奇道其敗必矣爲今計者陛下復幸叡山召還義貞縱賊入京師而臣歸河內絕其糧道則賊兵日散我兵日聚於是夾而攻之可一戰而殲也義貞之計蓋亦出此顧慮人言耳戰道非一要歸於勝顧朝廷再計之諸公卿皆然之獨參議藤原淸忠不可曰正成之言信有理然西征之旅未接鋒天子乃棄京師再蒙塵於外殊傷大體且非兵之謀也今賊雖衆盛不過如前役皇師每以寡弱奏捷豈兵之力也哉蓋陛下聖德獲天祐也已其速決戰于京畿外則於誅之乎何有天皇從之正成退謂其子弟曰事已至此何必抗議五月十六日

十六日ヵ右歸

○

㊁故ニ戰ヒハ人民不和ノ間ニ發スル慘酷劇甚ナル爭ヒナリ宗門法敎ノ是非國家政事ノ當否ヨリ相ヒ互ニ爭發スルトキハ則チレリギー及ヒヒユルゲルノ軍ヲ興ス今之ヲ譯メ軍トシ士軍トス諸般ノ戰ヒハ攻守二事ニ過ギズ然レドモ攻守常ニ混ヘシテ分ルヽコナシ何ントナレバ則チ攻メテ守ラズ守テ攻ザレバ全軍鏖盡ノ禍アレバナリ

凡ソ軍旅ノ歸趣スル所ハ和ヲ許シ其兩全ノ利ヲ謀ルヲ要トス然ルトキハ其此ニ用ルノ軍士ハ常ニ預シメ軍裝ヲ整頓シ且ツ軍際必用ノ諸件ヲ自得セシムルヲ要ス

其功ヲ立テ其和ヲ謀ルニ或ハ從來ノ軍士ヲ用ヒ或ハ亂ニ臨ミ急ニ操練未熟ノ者ヲ成スルカデルスヲ用ユ

○衣河戰

謂武則曰吾得至此子之力也子視吾面目爰若也對曰臣爲將軍執鞭何力之有將軍盡忠於天子暴露于野十餘年頭髮皆白天地爲動將士爲奮破虜如決河臣今視將軍髮復半黑也卽獲貞任則全黑矣

○

士以身許國及成其功則幸與不幸在存焉苟不失其正則雖死之年猶生日而勇

肝義膽與爲直天地終始矣

○

凡ソ万國大小ノ政ヲ執リ其得失ヲ正シ其邪正ヲ分チ其爭ヲ判スル處ナク強弱其律令ヲ異ニシ上下其私欲ヲ恣ニシテ人民生產ヲ完ンスルヿ能ハザレバ國必ス戰ヲ起ス軍士又從テ備ヘザルヿヲ得ザルナリ㊀

三兵活ニ法曰所也

○

水の色はよしにこる共隅田川そこのにこりはくむ人そしる

かも川にあたら白波たゝせしと心せかれておくる月日か

右二歌容堂公

咲花の色香にまよふ心にてつとむる道を常ニわするな

土佐守様　行年十七才

我つみハきみかよを思ふ眞心のふかゝらさりしるしなりけり

頼三樹

十寸鏡きよき心はたまのをのたへての後の世にしられけり

○

かすミや東にくたらせ給ふ長歌

かけまくもゆゝしかれともやすみしゝ我大君の高ひかる其姫ミ子のいかさまにをもほしめせか九重の都をおきて天離東の國をとこミやとさためまつらすあらましをきくそうれたきミかとてをおもへハゆゝしぬはたまのよのまの夢かうつゆふのうつゝにかあらしさりともとうらたのみてしかいもなくきのふにけふに諸人の世にかたりつきいゝつくをきけはまことかもろこしにかゝみのかけをうらみミつゝふるき都を立出けんその古しへも今さらにおもひこそやれしかわあれとそれは異國かしこくもこのやす國はすめろきのしらすミかとそ神世よりかゝるためしはなよ竹のよは末なれやまかつひの神のしわさをおはつれのまかとゝかもむらきもの

心をいため夜るひるに時もさためすひさ方の天つミそらを打あふきなけ
くおきそのさきりさへミつるをりしもくもる日のかけ
かしこくも雲井をよそに立出て木曾荒山こへまさんとは
かしこくもけふ九重の御かと出をなけかさらめや四方の民艸

大橋順藏の妻　あき子

○

千早振神世のむかし神々のしつめたまいし日本のきよき光りは古しへも
今もちとせもよろつよもする迄の松山する迄かげてかハらぬ君が御世なるを
かくとハいさや白波のよせくるとにこと國のこと浮船のえみしらかあら
ぬねきとつと〳〵にうけひく國のあやまちをはちぬたけをの心から御國
のをものはみなからまめ〳〵しくもをもほへすまとふ心にぬばたまのく

とき女

ろき眞邊をかたらひて世にたくひなきミいさをハさはにあれともあやま
ちは露もをわさしひしりなすかしこき君をしりそけてかゝねまたまをは
るにまつ花散る風にいちらして晴し雲井をくもらするたくみのほとのあ
さましくうき世の人の言の葉を聞もくるしき老の身は四十しのむつにな
りぬれとなゝそのミつのをいのはゝ朝夕さらすつかへつゝわかれのこと
をうれしくもともに心をそへられておふ君の爲め國の爲めをくれなとり
そとをおしくも老いの言葉もちからいふ露をふくめる朝ほらけ日も立い
つるむねの常陸之出てしきしまの道なる御世をしたいつゝ行もかへるも
梓弓はるけき道をさゝかにのいともたゆまずひきそへて雲の上までかけ
はしを渡る思ひはあまさかるひなにうまれしちりのミのちりつもるてふ
山の井のふかき心の源ハ流てきよきまろ水の中にすみぬる魚心つたなき
身をもわすれつゝ御國の爲と朝夕に心は千々にくだけともたゝ一筋に行
水のせみの小川にみそきしてはる〳〵きぬる旅衣時つくる鶯の野末ニに

ほふ梅ヶ香を風のたよりに久方の天津空まで聞へあけかしこけれとも九重に雲井の神にたてまつるなり

梓弓心いらすハ雲井までミちにたゆまずのほらまてやは

○

條約

一死ニ不後ハ武士之本意候得共暴ニ近キ之擧動無之樣固相戒終始義ニ當ルノ處置可爲肝要事

一忠告切磋者同志第一之惡務ニ候間禮讓深切不可失事

一多人數ニ而紀律無之テハ混雜可致ニ付伍長惣頭等立置候間事大小ト無ク頭長之差圖ヲ可受事

右之條々固相守

君上御爲之筋可相勵若破盟背義之輩於有之者屹度法令相正シ割腹打棄等之可及作配事

文久二壬戌之年土佐之國ゟ五拾人之來ル條約等

決心欲手掃丕制一劍直當百萬兵成否元來皆天耳欲留報國盡忠名

三島三郎越智通桓

士と云題にて

大君の御言しあらハ壯夫は疾馳參りたてまつへし（脫字カ）

越前公

獄中にて

しひて吹嵐の風のつよけれハなにたまるへき艸の上の露

辭世

玉のをハよしやたゆとも君人の陰の守とならんとおもへハ

玉鉾の道わかぬ迄夏艸の生しけるともふミなまよハそ

春をへて咲櫻花咲て後いろそふ紅葉誰にくらへん

誰か爲のねきとそとハ玉くしけ二荒の山の神や知らん
浮雲のかゝれハかゝれ世の人の鏡にうつる秋の夜の月
右六歌ハ水戸家老　安島帶刀

○

松風の音たに谷うしとしのふ世ニあなわつらハし沖津白波
蓬生ふるみぬ間のむしもにこりにはしましとてこそ水すますらめ
流來てよるへなきさの君か意にすかるや拂ふ峯の松風
右三歌は關口氏奥州廻國の節よめり尤後の一歌は水戸へ歸りたる時
會澤常藏先生の家來て別ニよめりとなん
冬の夜の雪に聲あるしつけさは秋には勝るもの思ひそする
亥の正月ニ上京之節關口氏に別を問ひける時とりあへずよミしとな
ん

朝なよにうらの松原はる〳〵となきてすき行郭公哉

○

報國忠死名錄

安政午正月四日牢死　蓮田東藏
同　六月九日牢死　信田仁十郎
同六年八月廿七日刑殺　茅根伊與之助
同　鳥首　鵜飼吉左衞門
同　七月七日刑殺　同　幸吉
同　橋本左内號黎園
同　飯泉喜内
同　賴三樹三郎
安政六年十月廿七日刑殺　吉田寅次郎

同　二月廿七日牢死	村田雷助	
同　十一月十九日牢殺	小林民部權太輔	
同　三月十八日牢死	成就院感應法印信海	
万延元七月十九日牢死	大貫多助	
同　三月三日牢死	日下部裕之進信政	
同　四月十三日溺死	宮田瀚兵衛	
同　三月三日	佐野竹之助	
同　三月八日死	有村治左衛門	
同　六月十四日死	山口辰之助	
文久酉七月廿六日刑殺	鯉淵要人	
同　十一月五日牢殺	廣岡子之次郎	
同　十二月廿五日刑殺	稲田重藏	
	齋藤豎物	
	黒澤忠三郎	
	大岡和七郎	
	蓮田市五郎	
	森山繁之助	
	松山彌一郎	
	金子孫次郎	
	岡部三十郎	
	森五六郎	
	住谷寅脫カ之助	
	榊鉞三郎	

文久二戌正月八日牢死　石井金四郎
文久二戌正月十五日牢死　千葉昇平
　　中島久藏
　　三島三郎
　　豐原邦之助
　　細谷忠齋
　　吉野政助
　　淺田儀藏
五月十一日刑殺　相田千之助
同月廿五日牢死　內田万之助
　　關鐵之助
　　中野芳藏

六月廿五日牢死　小嶋强助
八月朔日牢死　伊藤軍兵衛
八月十日　同　落合鏞之助
同廿五日　同　柴田市之助
同十日　同　石黑筒齋
六月十二日同　横田藤太郎
九月十三日同　廣木松之助
万延元六月二十七日牢死　櫻靜
文久元十一月五日　同　嶋男也
万延元七月六日　奴女瀧平
〆五拾四人

○

くれ近く入しほさむしほとゝきす

○

三月十八日齋藤兄別盃ス同九日ニ歸國之樣此便に波平之刀歸ス此刀之儀は先やめ申候刀は是ニ御座候

○

文久亥五月

姉小路樣御參殿之御歸ニ三條日野御門近ニ而御別被成候所一人何者共不知刀以而姉小路樣目かけ切而かゝり候けり候所姉小路樣右之者を手取ニし候所刀をすてにげ候樣子又一人切かけ申候所先之者刀ニ而切付候バ此もにげ候尤姉小路樣ハ先の者ニ首二刀むね一刀切られ申候故くせ者ニきずを付候事出來不申候姉小路樣家來次者を以行き歸見れバ又一人來而切合ニ及申候故家來大音ニ而しかり候へば次の者もニげ申候初之者の刀持家來かたにうちかけ歸候所御居次ニ而まくら以こいと仰られ候まくらすけ其まゝいきは御たへなされ候

○

關白殿の前にはり紙有り

○

三條中納言も切申樣此　申候所三條聞れ御共廻り二人げんじ申候正道行に何はぢ有らんと仰られ申候と而始終御共二人

○

正一月

○

申正月十八日

○　面彼矢す事不成ハきて筆取り印す

寅ノ六月

五兩　福地備用（借カ）宗七ノ妻ノ困窮をたすくる也

飯泉喜内

卯ノ四月

貳兩　松本小野急ニ下坂ニ付福地より備用

○

卯三月三十日小松うしの前商法之興方當急之義を論す太夫服す太夫曰大久保行て論せよ大久保ハ密成者故開門(導カ)丸より櫻嶋の長の引合まで申せと て則大久保ニ行キ丸より越和丹十祭紀之引合方まで談大久保其大意と此苦心くみて内田ニ行けとさしづす又内田ニ行く内田なみだをおとして是非此義は精大成さんとて吾ニ語を通す商人家室ニかゝりた急難ハ大久保内田ゟ談る事成し也大久保内田兩役小野兄の御面披ニ相かゝわり候樣の取さばきハすましき也といともたしかに見ゆ

○

二千六百兩

右惣高之内四百小曾根ゟ備用所此ハ名目にて實正備用之所は與三郎手張之面印尤二千六百兩は砲筒之買入之義は小曾根主成ル故家敷之名目ニ私周旋致候は大坂屋敷ニ於ゐ其明白ニ相分り候竹中福地小曾根立合之上義也

○

三月朔日(節句)夜陸奥與三郎來りて近文福丸屋松葉屋せまりたる事談す吾服(腹カ)わたをたつくるしきもよふ〳〵しのぶ與三郎いふ昨外方より四千金の談有りといふ其あくる日の朝陸奥も與三郎もそれ〳〵の口ニ取かゝりしといふて退吾業(ハザ)今まだ時の來たらぬとて心のやる方なし然しながら大久保内田小松のうしなどにハ此苦心通せし故難ハすくいてくれしなん思ふ嗚呼事成ハ幸不幸有りて成終事甚たかたき也小人の心を以ゐ不可計矣

○

卯四月十三日

中岡之世話を以ゐ坂倉より千三百兩備ス月日ハ六月迄ゐ也利足ハ貳歩五

厘之定

内

四百五拾兩ハ豊甚ニ相渡す

八百五拾兩ハ松尾ニ相渡す幷預り手形を受取小野持所

○

大津之人

今坂勘六

横江九十郎

高橋織右衛門

卯四月九日福地より

へこ帶　　拂方ス

壹歩三朱　　㊞

四百文

一一ト重物

壹兩壹歩三朱貳百五拾文

○

左之二千金手形之義は延手形故益に不相成候故返納す千金ハ陸奥米吉兩人西堀へ行き則豊仁ニ相渡す尤請取之手形も不取此千金は砲之代金二月に崎陽ニ而小曾根貳千六兩砲を馬關ニ廻す爲也其内小曾根ニ吾四百兩備用義申込ム其四百金たるや三千六百之内を融通致餘吾手元ニ用し分ハ與三郎手張に立合之上印所也

覺

一千五金　　愛甲ゟ請取

内六百西堀方ニ渡す又二千の手形にて和泉屋ゟ長崎會所へ渡談し成り引のこり九百有ル此レより小拂の談に至ル

二十八日

一千金

右は豐崎屋ゟ相渡す米吉陸奥兩人持參也手元ゟ請取不取米吉分請取之義沙汰なし

一三百

右は白糸手附として中村ニ相渡す江近行の事也

一百兩

右は西堀善兵衛方ニ相渡家の買入の手附として

一五拾兩

右は陸奥京行として相渡

一五拾兩

右は小野備用として請取候へ共薩萬へ三拾兩相渡すのこつて貳十金小の所持也此こづかいの爲也

〆千五百兩皆相渡す此之金福地白峯竹中小太夫ゟ申込ミ愛甲氏下坂の上このこまで相下し候處の金也

右之金子卯二月十五日に返納書文入ル筆者陸奥主し吾と兩名にて愛甲新助殿あて

○

卯四月

十兩　薩萬宿へやらんとて石川より借用ス

○

とふしん也

三輪吉太夫

キ印役人

○

一六月第一日水戸浪士甲宗助といふ人頭立其州六人助力を申込むすがの（○菅野）てら内（○内寺）さとふ（○佐藤）ゆるさず候

一大坂惣年より安井マ　ニ勝より願みとして僕使ニ行く此人の力大也

一勝の下役人ニ黒岩甲取兩人城だいさかい奉行ニ申入少々ゆるく成ル孝子徳と皆其節うわさしたり

○

長州ニ而初アメリカヲ打此賣商船ナリ和蘭ノ船ヲ又打ッ賣商船ナリ

一日ヲキテ「フランス○ノ軍監(鑑カ)來り而百五十ポンドフランスを打カケ候互ニ打合甚し敵味方六七十發位打長州炮臺少シソンジ候十七間の軍監モソンジ申候フランスノ軍監モ「ホ柱又船少々ソンジ申候

○

見物の人數幾百人といふ數を不知皆々高聲ヲ發して喜ブそれより廣井ハさかいの町奉行ニ相あづける此又僕周せんす廿日計すぎて住吉陣ニ歸ル度々足ヲはこんでしバ〳〵彼ニまみゆ彼嘶ニ曰君の力ニ依而一ヶ年のあだむなしなさゞるハ僕生外の大おんとなみだながらにかたりけり

○

一大坂長町　せんたく屋のお(たけ)

一さかい町　松屋の五十一オ

サカイ住　頁七三十六オ

一金助の江戸梅の口書キ

たな橋ハ江戸といふて今紀州の臺場ニ有ルと聞ク此より勝ニ願み田中をきの國ニやる二月十日舶(マ)監所ニて聞大樹公十三日ニ相成と聞タナ橋三郎ヲ

亥六月二日泉州ニ而父ノアダヲウッ

立合　廣井岩之助　千屋虎之助

甚見事ニ樣聞

○一時計左右方ねめ合いきをつめいどみ合し處廣井ゟ右ノ手ヲ少しきる
二の刀左の手ヲ切ル此ふかでになれバ左ニ廻ル處ヲ右の腰服ヲ切候服
中半切レたをル途ニ止メさす

○

亥正月廿二日春岳公攝海御見分之爲且上洛として品川ヲ發ス同廿五日
大久保越中守樣へ拜眼ス大樹公二月廿六日之處廿二日ニ相成ル
一正月十八日勝先生大廣間ニて將軍職自退之義大義論之由麟太郎先生ゟ

新宮馬之助
紀州
田中昌藏
出羽庄内塾頭
佐藤與之助

咄し承地ス先生ハ衆役之爲ニ命ヲそんじるもしれズ思ふ

浪人懸り
目附役

浪人被扱シレ□
最　。。
浪人取締

大目附
丑込住
十二月ニ爲誅ス

杉浦庄市郎
池田信濃
鵜殿鳩翁
松平力之助
山岡鐵太郎ヨ
窪田治部衞門
松岡昌市郎半
淺野伊賀守
渡邊傳太郎
花輪次郎

正月ニ誅ス

○卯野東櫻
力石太郎
山藤權之進

山藤右渡邊の下人と爲て薩長土を聞合ス此の渡邊は淺野の下役と爲て三藩其外正儀の勢聞合ス然に花輪の三德に右之人々の密書有るを以て有志知る正月下旬ニ書ス也

○

浪人頭

清河八郎

右之人浪人頭ヲ被仰付依之ニ浪人來り候時は貳人不知に金拾兩幕ゟ被下候樣承少しの間にて浪人四五拾人參りしと聞右數浪人幕府上京時參るゝ樣勝麟太郎先生ゟ夜にて聞し事此は春獄公大失策也亥の正月廿二日の夜しるす幕も大きに勢無之き事と知るべし一笑々々

幕便共得力候趣ニ候

因藩

亥正月廿四日

ニ上京ス

千葉重太郎
勝部信藏

右之人々正義ヲ申時節たからもふ〳〵正義も地落ると知べし

「正月七日諸浪人出立

人數凡三百人ト聞

勝塾生名

淺見信
千海直藏

筒

高木三郎

塾頭

横もじ先生と聞定
布ミそなるべし

○

亥二月七日　岡田以藏來りて谷氏に面會をこふ其日金策公ニ合ふ其治段告る

佐藤與之助
何和ハシ
大持敬捕
高柳表二郎

○

カステイラ仕樣
正味
玉子百目　うとん七十目　さとふ百目
此ヲ合テヤク也　和蘭實方

海援隊日史

起慶應丁卯首夏

一慶應三丁卯四月本藩參政福岡藤次　命ヲ奉シテ長崎ニ來ル時ニ才谷梅太郎馬關ヨリ來リ　命ヲ拜ス其文ニ

覺

坂本龍馬事
才谷梅太郎

右者脫走罪跡被差免海援隊長被仰付之
但隊中之處分一切御任セ被仰付之
卯ノ四月

(朱書)
一才谷既ニ此命ヲ拜シ七八年間共ニ佗國ニ退遊シ海軍ヲ皇張シ誓テ王事ニ死セント約セシ本藩佗藩ノ脫生二十八許皆此隊中ニ入ル文官武官器

機官側量官運用官醫官等ノ課ヲ分ツ水夫火夫ヲ合セテ五十人ヲ得タリト云々

一本藩出碕參政ト海援隊約束書ヲ以テ隊長ニ與フ其書ニ曰

海援隊約規

凡嘗テ本藩ヲ脫スル者及他藩ヲ脫スル者海外ノ志アル者此隊ニ入ル運輸射利關拓機本藩ノ應援ヲ爲スヲ主トス今後自他ニ論ナク其志ニ從テ撰テ入之

凡隊中ノ事一切隊長ノ處分ニ任ス敢テ或ハ違背スル勿レ若シ暴亂事ヲ破リ妄謬ノ害ヲ引クニ至テハ隊長其死活ヲ制スルモ亦許ス

凡隊中患難相救ヒ困厄相護リ義氣相責メ條理相糺シ若クハ獨斷果激儕輩ノ妨ヲ爲シ若クハ儕輩相推シ乘勢强制シ佗人ノ妨ヲ爲ス是尤愼ム可キ所敢テ或ハ犯ス勿レ

凡隊中修業分課政法火技航海機學語等ノ如キ其志ニ隨テ執之互ニ相勉勵敢テ或ハ懈ル事勿レ

凡隊中所費ノ錢糧其自營ヲ功ニ取ル亦互ニ相分配私スル所アル勿レ若擧事用度不足或學料缺乏ヲ致ス隊長建議出碕官ノ給辨ヲ俟ツ（以下節略）

慶應三丁卯四月

一越テ四月廿三日隊長及ヒ小谷耕藏渡邊剛八等イロハ丸ニ乘シ紅白紅ノ旗章ヲ揚ケテ上國ニ赴ク船中國海ニ到ル時紀州軍艦明光丸ノ爲メニ衝沒セラル後數日長崎ニ於テ難論數回紀遂ニ罪ニ伏シ謝書ヲ贈リ償額金ヲ出ス故ニ恩宥ニ隨フ

此事航海日記附錄ト標シ一冊ト爲シ別ニ存ス故ニ此ニ錄セズ

一越テ六月九日本藩ノ運送船水蓮（シュリン）長崎港ヲ發ス由井桂三郎船長タリ參政後藤象次郎附屬官松井周助高橋勝右衞門隊長才谷梅太郎文官臣謙吉等同乘タリ翌十日馬關ニ達ス十一日晴天曉霧岩見島ノ邊ヲ過ルトキ少シク暗礁ニ觸ル破傷大ナラズ十二日朝兵庫ニ達ス午後大坂長堀ノ邸ニ入

ル同日後藤松井等上京十四日京師ニ到ル邸外ニ宿ス

一十六日野邑辰太郎白峯駿馬兵庫ヨリ來ル

一廿二日薩ノ太夫小松帶刀參政西郷吉之助等吾藩士ト三樹ノ水亭ニ會同ス此會ニ關カル者七人矣

一七月四日出京五日朝着坂七日後藤及ヒ眞邊榮三郎等大坂出帆

六月九日ヨリ七月七日ニ到ルマテ廿八日ノ間種々ノ記載スヘキ事アリ今省文ニ從フ

○幕府暴逆失體ニ因テ相議シテ檄文ヲ作ル其文ニ曰

○此間脫文アリ

今般更始一新我

皇州之奐復ヲ謀リ奸邪ヲ除キ明良ヲ擧ゲ治平ヲ求メ天下万民之爲メニ寛仁明恕ノ政ヲ爲ントシテ共ニ神明ニ誓テ左ノ文ヲ作

一ニハ政ヲ爲ント共ニ心ニ盟シテ左ノ文ヲ作ル云々

一天下ノ大政ヲ議定スル全權ハ朝廷ニ在リ我　皇國ノ制度法則一切之萬機京師ノ議事堂ヨリ出ルヲ要ス

一議事院ヲ建立スルハ宜ク諸藩ヨリ其入費ヲ貢献スベシ

一議事院上下ヲ分チ議事官ハ上公卿ヨリ下倍臣庶民ニ至ルマテ正義純粹ノ者ヲ撰擧シ尚且諸侯モ自ラ其職掌ニヨリテ上院ノ任ニ充ツ

一將軍職ヲ以テ天下ノ万機ヲ掌握スルノ理ナシ自今宜ク其職ヲ辭シテ諸侯ノ列ニ歸順シ政權ヲ朝廷ニ歸スベキハ勿論ナリ

一各港外國ノ條約ハ兵庫港ニ於テ新ニ　朝廷ノ大臣諸國ノ士大夫ト衆合シ道理明白ニ新約定ヲ結ビ誠實ノ商法ヲ行フベシ

一朝廷ノ制度法則ハ往昔ヨリ律令アリト雖當今ノ時勢ニ參シ或ハ當ラザルモノアリ宜ク其弊風ヲ一新改革シテ地球上ニ愧ツベカラサル國擧ヲ建シ

一此　皇國興復ノ議事ニ關係スル士大夫ニ私道ヲ去リ公平ニ基キ術策ヲ設ケズ正實ヲ貴ヒ既往ノ是非曲直ヲ不問人心一和ヲ主トシテ此議ヲ定ムベシ

右ニ議定セル盟約ハ方今之急務天下ノ大事之ニ加クモノ無シ故ニ一旦盟約決議ノ上ハ何ソ其事ノ成敗利鈍ヲ視ンヤ唯一心協力永ク貫徹セン事ヲ要ス

慶應三年六月

一越テ七月四日京都發足五日着坂七日後藤眞邊乘船歸國ス隊長及ヒ余カ輩ハ浪華ニ留ル

○佛朗西ローレンスナル者日本ノ事情ヲ探索シ

同國オリンハンドニ送リシ書翰譯文

外國人ノ日本國内ニ於テ施ス處ノ策ハ　皇威ヲ弱クシ幕威ヲ强クスルヲ主トス蓋シ始メ幕府ト相議定セル條約モアレバ暫ク幕ノ後ロ楯トナリテ海陸軍ヲ以テ之ヲ助ケントスル所以ハ陰ニ相圖ル事モアレバナリ諸藩士ハ見識淺陋ニシテ輙モスレバ外夷トノ抗抵ス故ニ豫備セサル能ハズ一旦事アラバ幕ト勢ヲ合メ相應援スベシ馬關鹿府ノ事ニ於テ見ルガ如シ

諸侯ノ内ニ一人モ見識アルモノ無キガ故ニ自ラ一致シ難シ是方今日本諸侯ノ爲シ得ベカラザル一ナリ既ニ佛國ニテ帝王薩ノ岩下ニ逢フヲ嫌ヒシ事アリ是ハ右ノ一條ニ關係スル所以ナリ譬ヘバ鹿府ニテ士人ニ害セラレン時ハ政府ニ關係セサルヲ得スト雖モ直ニ各藩ニ條約外ノ事ナレバナリ如斯事件アリテ幕府悉ク之ヲ裁斷スレバ幕威增々張リ皇威增々削ラル可シ何トナレハ吾輩後ロ楯ト成テ常ニ之ヲ煽動スレバナリ

若シ幕威ヲ削ラント欲セバ　帝王親ラ政ヲ執リ人ニ假スベカラズ　帝王幕府職位自ラ分別アリ是レ全世界ノ大條理ナリ

朝廷ヨリ政刑ヲ出ス時ハ外國人自ラ國法ニ從ハザルヲ得サル也

唯義理確然恐喝ニ因テ動搖ナキヲ要ス然ラサレバ威令行ハレス

帝王自ラ政刑ヲ執リ緊要ノ事件ハ一ニ自ラ所置スベシ外國ニ關係スル事等ハ最モ然リ決シテ幕府ニ任スベカラズ

日本ニハ古來一系ノ　帝王アルカ故ニ幕府決シテ事務ニ關係スベカラザル者ナルヲ明カニ外國諸全權ノ者ニ布告セサルベカラス

諸條約書一切　帝王ノ印鑑ヲ以テ行ルベシ然ラズンハ權佗人ニ出ツ是亦全世界ノ公義ナリ諸侯ハ只　皇威ヲ皇張セン事ニ注意スベシ然ラズンバ帝家ト將家ト區別明白ナラズ

日本若シ外國之凌辱ヲ防カントナラバ唯秀才一人及ヒ敎化サレタル民間ニ存スル公法ヲ領會シタル一人ニテ足レリ

日本人ハ未ダ世界ノ公法ヲ知ラザル事外國人皆知ル所ナリ我輩ハ公法ヲ知レリト雖モ或ハ犯サザルヲ得サル事アリ譬ヘバ日本人妄ニ洋人ヲ殺害スルガ故ニ豫メ兵備セザルベカラズ兵備ヲ處クハ吾輩ノ公法ヲ犯ス者ナリ亦止ヲ得ザルニ出ヅ

眞ニ外國人ト戰ハントスレバ干戈ヲ用ユルヲ須タス唯筆墨有テ足レリ蓋シ大條理ヲ執テ戰爭スルナリ

日本ヲ窺偷スル一二姦惡ノ洋人アリ其罪ヲ各國ニ鳴シ日本ヲ退クル時ハ必ス事ナクシテ止ムベシ

然ル時ハ歐洲ニテ　王正義ノ人ヲ撰ンテ日本ニ致ラシメ自ラ內外和力シテ緊要事務ヲ謀ルニ到ルベシ

諸侯ハ攘夷鎖港ノ論ヲ確執スベキナリ如何トナレバ時勢ノ此ノ如キニ到リシハ全ク幕府ノ暴威ヨリ出テシ者ナレバナリ

一切ノ大政ハ　帝王ニ出ツ然レ𪜈　帝王幼弱ナル時等ハ攝政ト會議衆ト相謀テ政刑ヲ出ツベシ此二局之決斷ヲ經ザルハ將家トイヘ𪜈恣ニ政刑ヲ出スベカラス

攝政ハ常ニ外國ノ事務條約ノ目ニ注意メ或ハ勅使ヲ出シ或ハ書翰ヲ出ス等ヲ事トスベシ

攝政トイヘ𪜈會議衆ト攝政所トノ二局之評論ヲ經ザルハ妄リニ政令ヲ發スルヲ許サズ

大諸侯ノ臣屬相合メ一大兵隊ヲ設ケ立テ　帝王ノ親兵ト爲スベシ云々

右譯文章法疎拙ヲ免カレズ讀者唯大隊ヲ領會シテ可ナリ云々

慶應丁卯

○

天下憂生ノ士口ヲ噤ンテ敢テ言サルニ到リシハ誠ニ可懼ノ時ニ候

朝廷幕府公卿諸侯旨意違フノ意誠ニ可懼ノ事ニ候（ニ似タリ）

此ニ懼ハ我ノ大患ニシテ

○

六月五日七ッ時頃急御召ニ付泉州屋敷當御將軍樣御旅館ニおゐて御勘定

奉行大坂町奉行大目附立合會星野豐後守被仰渡下次第

鴻池之事　山中善右衞門

加島屋　廣岡久右衞門

右同　長田作兵衞

右兵庫開港ニより交易取締頭取被仰帶刀御免新田之內百石ヅヽ被下置

候

米屋　殿村平右衞門

米屋喜兵衞　やを屋久右衞門

千草屋　平野屋五兵衞

炭屋　石崎喜兵衞

平瀨龜之助

白山彦五郎

右同所取締方被仰付辰久（平上本ノマヽ）苗字御免非常帶刀被仰付新田之內五拾

石ヅヽ被下置候

外ニ御用方

新規加入

夫々名前不知

右同所苗字御免拾人扶持被下置候

鴻池庄之助
炭屋安兵衛
加島屋作助
加島屋作五郎
やを屋名前不知
錢屋忠兵衛
松屋伊兵衛

但拾貳間之内名前相分ヲ候人數殘ヲ者

皃水納涼小詩

夜聽潺溪坐鴨磯。滿軒涼露滴蕉衣。佳人先定後遊地。噌々堂成在翠微。
傍樓垂柳捲涼吹。京洛風流夏最宜。髮影搖籠人私語。此情只許晩燈知。

海援隊商事秘記

海援隊
商事

今度丹後國田邊と商法取結び之事ハ當秋八月比其藩士松本檢吾より我が隊士菅野渡邊陸奥等ニ示談ニ及ベリ夫ニ依て互ニ條約取替たる文言

條　約

一今般貴藩と商方御取組致候上者以後永續して互ニ平等公道を守り信實ニ取斗ひ可致ニ付左之條目を相定候

一貴藩御產物長崎へ御出ニ相成候節ハ賣捌等此方屋敷ニて一切引請御世

話可申候若又品物ニ付時價不當之品有之候ハヾ其品物代價ニ應じ世界定則之歩割金を指出置直段引合之上惣會計を相立可申候

一貴藩御産物御仕入ニ付金子御入用之節ハ此方ニ於て御相談可申候尤も品物長へ到着之上ニて會計相立可申候

一貴藩より御産物御運送ニ相成候ニ者此方ニ而商船等御用立可申候

一二丹州并但若兩國之産物等此方ニ買入致度節ハ御隣國之譯を以て貴藩より御世話被成下度候

一貴藩に於て西洋器械及び諸品物等御入用之節ハ此方兼て取引之洋人より買入可指出候

右之通り互ニ相守違背有之間敷仍而定約如件

慶應三年　卯九月

松平土佐守内　才谷

牧野豐前守様御内

松本

右之通り我か隊長ゟ條約を出し又松本ゟ假定約を請取る其文言左ニ相記候

條約

一今般貴藩と商方御取組致候上ハ向後永續して互ニ平等公道を守り信實ニ取斗可致候ニ付左之條目相定候

一弊藩産物長崎へ差出候節ハ賣捌等貴藩御屋敷ニ而一切御引請御世話被下度候乍然品物時價不當之品有之候ハヽ其品物代價ニ應し世界定則之歩割金御差出置被下直段引合之上惣會計相立可申候

一弊藩産物仕入ニ付金子入用之節ハ貴藩ニ而御相談被下度尤も品物長崎着之上ニて惣會計相立可申候

一弊藩ゟ産物運送仕候節ハ貴藩御商船御貸被下度候

一二丹州幷ニ但若兩國之產物貴藩ニ而御買入其外弊藩ニ而周旋可致候義ハ一切引請御世話可致候

一弊藩ニ而西洋器械及び諸品入用之節ハ貴藩兼而御取引之西洋人を御周旋被下度候

右之通り互ニ相守違背有之間敷依而定約如件

牧野豐前守内　松本檢吾　書判

松平土佐――――

才谷――――殿

如右互ニ取替たるニ付約條之通り產物仕入金を松本ニ渡すことを約し先ツ長崎ニて金子五百兩相渡し猶殘り金之處ハ大坂ニて相渡し候筈依て松本を請取證書を取る左ニ記す

證書

一金五百兩也

右者此度商方御取組相願候ニ付產物仕入金之內借用仕候處實正也然ル上ハ大坂表ニ於て御融通ニ相成候分と共ニ十一月中旬迄ニ產物長崎表へ指出し御返金可仕候條明白ニ御座候爲後日證文仍而如件

丁卯九月十四日　牧野豐――內

松平土――――　松本――――印

才――――殿

同九月十八日藝州蒸氣船震天丸借受け此之條約を結ぶ爲ニ菅谷眞之助陸奥陽之助田邊藩士松本撿吾同伴して長崎出帆し丹後ニ趣く

同月廿四日長州下之關ニ着す此處ニ於て無余義仕儀有之震天丸　直樣土佐ニ相廻り菅谷陸奥松本外ニ兩人商人壹人下僕壹人別ニ早船仕立大坂ニ出帆す

丁卯九月十四日蘭商ハットマンと條約ライフル一千三百挺買入之事を談す尤も四千兩入置余分ハ當日後九十日ニ拂渡す筈

同月十五日左之條約書及ひ金子四千兩持參陸奥陽之助及び請人鋏屋與一郎廣世屋丈吉（其外商人三四人）通事末永猷太郎同道にて出島ハットマン商會ニ至り昨日約束之通りライフルを請取る「談し直ニ引替たり其節ハットマン商會よりライフル目錄書付并品位請合書を出せり末永氏飜譯書も相添へり

此間種々ニ混じたる事あり

ハットマンニ出せる證文左ニ記す

證文之事

一ライフル　千三百丁

但シ九十日延拂之事

代價壹万八千八百七拾五兩

内金四千兩入

又金三百六拾兩（九十日分歩引）

差引殘り

金壹万四千四百九十兩

右ハ今般入用ニ付其許より買請候處實正也九十日限り皆納可申候以上

——三年　松平土佐守内

九月十四日　才谷梅太郎印

ハットマン商社

前書之通り相違無御座候若萬一延引及ひ候節ハ我等より相辨可申候爲其請印仕候以上

廣瀨や丈吉印

鋏屋與一郎印

一卯九月中旬長崎商人八幡屋兵右衞門を以て薩州藤安喜右衞門へ大坂爲
替金四千兩を相談す則ち才谷梅太郎借主ニして佐々木三四郎奥印す其
始末左ニ記す

一金四千兩

右ハハットマンはライフル代價之内へ拂入

一金一千兩　　田邊藩松本撿吾ニ相渡す證書別ニ有之候

内五百兩　　長崎ニ於て隊長才谷梅太郎ニ相渡す

又金貳百兩　　長ニ於て口入料として菅谷吉田ゟ八幡や兵右衞門へ

又金百五拾兩　　遣す云々

又金百五拾兩　　菅谷陸奥兩人上坂之入用持參細記者別ニ有之但シ末
永井商人謝義等相遣置且積舟入用も相籠居り候

一才谷梅太郎取入候ライフル千三百丁之内百挺丈け長崎商人鋏屋與一郎
廣瀨屋丈吉兩人ニ相預り置候始末

覺

一先日才谷梅太郎買主を以て蘭人ハットマン商社ゟ取入候一千三百丁之
ライフル銃之内百挺丈け其許御兩人ニ御任せ申候間惣金拂入之期限迄
ニ可然御取揃被下度候爲念證書仍而如件

陸奥源二郎印

菅野覺永無印

但し此節不居合故ニ印形無之候

右之通り相渡し又鋏屋廣瀨屋兩人ゟ預り一札を取る

同十月二日　無事ニて大坂ニ着す

同廿七日夜　陸奥菅谷與僕三人上京阿菊伏水迄來る

同廿八日　着京次于室町譯治

同三十日　與松本定約發京期明朝此夜誘松本離杯於祇園花街白峯亦會焉前後陸奥翁之周旋也

三吉愼藏日記抄

坂本龍馬ニ係ル件

日記抄錄

慶應二年丙寅正月元日

一御内命ヲ以テ當時勢探索ノ爲メ土州藩坂本龍馬ヘ被差添出京之義被仰付候ニ付卽刻長府出立ニテ馬關ニ至リ福永專助宅ニ於テ初メテ坂本氏ヘ面會ニ付印藤聿長府藩士ヨリ引合セ三名一同方今ノ事情懇談一夜ニシテ足ラズ翌二日ヨリ同宿シ協議ノ上至急登京ノ事ニ決シ出船ノ用意ヲ爲ス時ニ急便ナク止ムヲ得ス五日迄滯關ス

同月六日

一日切船ヘ乘組ミ同十日出帆ス風潮不順同十六日神戸ヘ着直ニ上陸ス此地ヘ一泊シ入京ノコトヲ計ル

同月十七日

一神戸湊川ニハ岡藩中川氏ノ警固アリ神戸ヨリ通船ニテ上坂ス細川左馬介寺内新左衞門ハ坂本氏ヘ隨行ニ付同伴ス兩名モ土佐ノ人ナリ

同月十八日

一大坂薩州邸ヘ坂本氏一同到ル留守居木場傳内ヘ面會シ事情聞取候處入京成リ難キ趣ニ由リ木場氏ヨリ薩藩ノ船印シヲ借受ケ坂本氏ヲ始メ薩藩人ト假稱シテ入京ノ用意ヲ爲ス夜ニ入リ大坂城代大久保越中守宿所ヘ坂本氏訪問ニ付同行ス越中守ヨリ内密示談ノ趣ハ坂本等事ハ探索嚴密ニテ目下長州人同行ニテ入京ノ旨相知レ其沙汰アリ手配リ致シタルニ付早々立退キ候方然ルベシトノコトニ因リ坂本氏一同切迫ノ情態ヲ察シ直ニ宿所ニ歸リ用意ノ短銃ハ坂本氏本込銃ハ細川氏拙者ハ寺町地方ニテ手槍ヲ求メ各々約ヲ定メ速ニ上京ト相決ス

同月十九日

一薩州藩士坂本龍馬上下四人ト船宿ヘ達シ川船印シ相建テ伏見ヘ通船ス

一八軒屋ニハ幕府新撰組出張ニテ人別ヲ改ム

一八幡淀ノ間ハ淀藩之ヲ固メ山崎ノ方ハ津藩之ヲ固メ川中ニハ所々船番所ヲ設ケ往來ヲ改ム伏見豐後橋邊ハ水口藩ヨリ固ム右ノ如ク嚴重ノ警固ノ處一同無事ニ伏見船宿寺田屋方ニ著ス

同月廿日

一坂本氏及ヒ細川寺内等先達テ入京シ目今ノ事情探索シ後レテ拙者ハ上京ノ事ニ約シ三名出立ス因テ拙者ハ薩藩士ノ都合ニシテ寺田屋ヘ潛伏シ京情ノ報ヲ待ツ

同月廿一日

一幕府新撰組廻番晝夜嚴重人別ヲ改ム因テ此時ハ二階夜具入レ物置キ等ニ潛ミ其場ヲ避ク

同月廿二日

一一橋公宇治ヘ進發用意トシテ伏見市中戸別調ラベ嚴重ニテ進退切迫ノ處彌ヨ一名潛伏ト見認メヲ受ケシガ頓テ内達アリテ寺田屋ヘ薩人一名止宿ノ樣子ニ付追々取調ヘ候得共不審無之者ニ付着置可然トノ由報知ヲ受ケ益ス寸暇モ油斷不相成ニ付用意ノ銃槍臥蓐中ニ藏シ覺悟ス

同月廿三夜

一坂本氏ノミ京師ヨリ來着ニ付キ兼テ約シ置キタル通リ手當致シ夜半迄京師ノ樣子尙ホ過ル廿一日桂小五郎西郷トノ談判（薩長兩藩和解シテ王政復古ヲ企圖スルコト）約決ノ次第委細坂本氏ヨリ聞取此上ハ明廿四日出立ニテ入京ノ上薩邸ニ同道ト談決シタリサレハ王道回復ニ至ルヘシト一酌ヲ催ホス用意ヲナシ懇談終リ夜半八ツ時頃ニ至リ坂本ノ妾二階下ヨリ走リ上リ店口ヨリ捕縛吏入込ムト告ク直ニ用意ノ短銃ヲ坂本氏ヘ付シ拙者ハ手槍ヲ伏セ覺悟ス此時一士刀ヲ携ヘ兩人ノ休所ニ來リ不審ノ儀有之尋問スト案内ナク押入ル兩人誰何シ薩藩士ノ止宿ヘ不禮スナト叱レハ彼レ僞名ナリト云フ故ニ疑ヒアレハ當所ノ薩邸ヘ引合フベシ明白ナリト云フニ彼レ又タ云フ兩人共武器ヲ携ヘ居ルハ如何ト是レ武士ノ常ナリト答ヘシニ彼レ階下ニ去ル此機ニ乘シ樓上ノ建具ヲ一目ニ打除ケ拙者ハ手槍ヲ搆ヘ坂本氏ヲ後ニ立テ必死トナル忽チ階下ヨリ數人押シ上リ各々得物ヲ携ヘツヽ肥後守ヨリノ上意ニ付キ愼ミ居レト聲高ク呼ヒ立ツルニ因リ我レハ薩人ナリ上意ヲ受クヘキ者ニ非スト云フヲ相圖ニ兼テ約セル覺悟ノ通リ一同銃槍ヲ以テ發打シ突立ツル彼レニ死傷アリ階下ニ引退ク其際一名坂本氏ノ左脇ニ來リ刀ヲ以テ拇指ヨリ持銃ニ切リ付ク坂本氏傷ヲ負フ此時槍ヲ以テ防キシモ坂本氏裝藥叶ハサル由ヲ告クルニ由リ此上ハ拙者必死ニ打チ込ントト云フヲ坂本氏引止メ彼レ等退キシ猶豫ノ間ニ裡手ニ下リ此場ヲ切リ拔ケ去ルヘシト云フ其意ニ任セ直ニ坂本氏ヲ肩ニ掛ケ裏口ノ物置ヲ切リ拔ケ兩家程ノ戸締リヲ切リ破リ挨拶シテ小路ニ遁レ出テ暫時兩人トモ意氣ヲ休メ夫ヨリ又走ル途中寺アリ此園

板ヲ飛ヒ越ントスルニ近傍多數探索者アル樣子ニ付路ヲ轉シテ川端ノ材木貯藏アルヲ見付ケ其棚ノ上ニ兩人トモ密ニ忍ヒ込ミ種々死生ヲ語リ最早逃路アラス此處ニテ割腹シ彼レノ手ニ斃ルヲ免カルニ如カスト云フ坂本氏曰ク死ハ覺悟ノ事ナレハ君ハ是ヨリ薩邸ニ走附ケヨ若シ途ニシテ敵人ニ逢ハヽ必死夫レ迄ナリ僕モ亦タ此所ニテ死センノミト時既ニ曉ナレハ猶豫ムツカシト云フ其言ニ從ヒ直ニ川端ニテ染血ヲ洗ヒ草鞋ヲ拾フテ旅人ノ容貌ヲ作シ走リ出ツ其際市中ノ店頭ニ既ニ戸ヲ開クモノアルヲ以テ尙ホ心急キニ貳町餘リ行ク幸ヒニ商人休ノ者ニ逢ヒ薩邸ノアル所ヲ問フニ是ヨリ先キ一筋道ニテ三丁餘リナリト云フ卽チ到ル留守居大山彥八出迎ヘ昨夜ノ樣子ハ坂本氏ノ妾來リテ注進ス行違如何ヤト煩念ノ處天幸ナルカナ此ニ遁レ來ルトハ今マ坂本氏ハ無事ニ連レ歸ルヘシ三吉氏ハ是ニ止リ居ルヘシト云ヒ捨テ大山氏自ラ船ニ印ヲ建テ有志兩三名ト棹シテ坂本氏ノ潛處ニ到リ迎ヘテ還ル一同閧然愉快ノ聲ヲ發ス爾後門ノ出入ヲ嚴守セシメ急ニ京師西鄕大人ノ許ニ報ス因テ吉井幸輔乘馬ニテ走セ付ケ尋問ス具サニ事情ヲ語ル又タ西鄕大人ヨリ兵士一小隊醫師一人差添坂本氏ノ療治手當方兩人守衛ノ爲メ差下ス由ニテ來着ス實ニ此仕向ケノ厚キ言語ニ盡ス能ハス夕刻ニ至リ兩人共ニ衣服ノ仕向ケ有之然處薩邸ヘ走リ込ミタル段奉行所ヨリ留守居所ニ糺問ニナリ兩人共ニ可相渡ト申來リ候得共右樣ノ者ハ邸內ニハ無之ト申シ切リ候夫ヨリ人數ノ手配ヲナシ探索更ニ嚴ナリ或ハ京坂ヘ人相書ヲ廻シ頻リニ薩邸ヲ窺ヘトモ邸內ニハ一小隊兵士ノ守衛アル故妄ニ手ヲ着クルコト能ハス扨寺田屋ニハ變動ノ翌日探索者至リ家內ヲ檢シ遺コシ置キタル銃鎗及ヒ書類用金等ヲ拾ヒ揚ケ奉行所ニ取歸リ候由寺田屋儀モ引合トナリ糺問嚴重ナル旨歸邸ノ後チ告ケ來ル坂本氏ハ追々快方ニテ本月廿九日迄伏見薩邸ニ滯在ス

二月朔日

一西郷大人ノ命ニテ兩人共上京可致トノコトニ付吉井幸輔乘馬ニテ兵士一小隊ヲ引キ迎ヘトシテ來ル同夜坂本一同幷ニ妾附添京師薩邸西郷大人ノ宿處ニ到ル大人出迎ヒ直ニ居間ニ坐シ事情ヲ語ル拙者ハ初メテノ面會ナレモ其懇情親子ノ如シ又タ一室ヲ設ケ坂本兩人幷妾トモ三人ノ休處トセラル是ヨリ日々時勢ノ動靜或ハ諸建白尙ホ西郷大人ノ他人ヘ尋問等ノ件々迄懇諭ヲ受ク諸有志二三名宛晝夜休所ニ來リ慰勞シテ相語タル此時小松帶刀島津伊勢桂右衞門三名ハ大夫西郷吉之助ハ中老ノ取扱ナリ大久保市藏岩下左次右衞門伊地知正治村田新八中村半次郎西郷新吾大山彌助内田忠之助伊集院金次郎中路權右衞門野津七左衞門鈴木武彌兒玉四郎吉醫師木原泰雲等ノ人々日々來話懇情至ラサルナシ

時ニ薩長和解彌ヨ王政復古ノ爲メ盡力兵備ノ手當ヲナスニ決シ西郷小松桂ヲ始メ一ト先ツ歸國ノ事ト定メ二月廿九日夜京師出立ニ付坂本兩人妾トモ同船ニテ拙者ハ馬關ヘ坂本ハ鹿兒島ヘ同行ストノ事ナリ依テ附添ヒ同夜伏見ニ着ス數人ノ有志伏見ニ送リ來ル三月朔日大坂藏屋敷ヘ着シ四日朝川船ニテ下リ薩藩蒸氣船三邦丸ニ乘ル五日朝大坂沖出帆七日夜馬關ヘ着ス直ニ通船ニテ拙者ハ上陸シ鷄其他赤間關硯等ヲ購シ西郷ヲ始メ諸氏ヘ離別ノ寸志トシテ船ニ持參ス間ナク出船因テ厚謝シテ別ル又タ坂本ヘハ他日馬關ニ來ルコトヲ約ス夫レヨリ拙者揚陸シ常宮屋六左衞門方ヘ暫時休息ノ内伊藤九三來訪ス夜半長府マテ通船ヲ雇ヒ歸ル

同月八日

一勝山御殿ヘ出頭京師ノ事情薩長和親ノ件々君公ニ言上シ且ツ之ヲ重役ノミニ談ス

同月九日

一命ニ依リ長府出立山口ニ到ル十四日宗家君前ニ召出サレ左ノ達書ノ通リ賜モノヲ拜ス

新身刀一振　　長府　三吉慎藏

右先達テ時情探索トシテ薩藩坂本龍馬同道京攝間ヘ罷登種々苦辛之折柄於伏見不慮之儀致出來其砌別而艱難ヲ經龍馬トモ相扶罷歸上國之模樣委細ニ及于報知不容易遂苦勞神妙之事ニ候依テ右之通拜領被仰付候事

同月十五日

一山口御用相濟ミ出立十六日歸府ス十九日勝山御殿ニ御用召左ノ通御賞賜ヲ蒙ル

三吉慎藏ヘ申渡覺

其方儀當正月御内用ニ付京師ヘ被差登候途中於伏見宿危難有之候處遂其節候段被聞召不辱御家名全兼而武門之嗜宜奇特之至被思召候依テ御藏米貳拾石被增下都合六拾石被仰付旨候以上

一龍馬妾ヲ携ヘ薩州ヨリ馬關ニ來ルヤ伊藤九三方ヲ寄留處ト定メ妾ヲ同家ニ留メテ竊カニ東西ニ奔走シ時勢ヲ慮リ國事ヲ勤ム往來必ス關ニ滯リ福原福田品川熊野梶山等ノ諸子ヲ勸誘シ且ツ長防ノ國難ヲ解キ君民勤王ノ素志ヲ遂ケシメンコトヲ圖ル藩主之ヲ嘉ミシテ短刀備前吉光ヲ惠贈シ且ツ臨時ノ費用ヲ扶クルコトアリ其海援隊ヲ長崎ニ組織スルニ當リテハ有志等往テ懇諭ヲ受ルモノアリシ龍馬又タ慎藏ノ宅ニ留滯アリ寄書數通載セテ別冊トス其徒石川清之助亦タ屢ハ來藩周旋スル所多シ其手翰モ別錄ニアリ我カ藩士ノ龍馬ニ交ルハ印藤聿ヲ最初トス

一慶應三年丁卯十一月十五日京都瓦町四條上ル近新ト云フ家ニ龍馬清之助及ヒ僕藤吉止宿ノ處夜四ツ時過キ賊三人虛ニ乘シ不意ニ切込ミ殺害ス龍馬ハ同夜死シ清之助ハ十七日ニ死シ直次郎ハ十六日ニ死ス

右ニ付長崎ナル海援隊ヨリ浦田軍次郎飛報トシテ十二月二日馬關來着事ヲ告ケテ直チニ歸府ス此報ヲ得テ即時馬關伊藤九三方ニ到リ有志ニ

報知シ談合ノ上變事ヲ坂本ノ妾於良ヘ諭示ス此時ニ當リ同志ノ長崎ニ滯ルモノ擧テ上京ヲ計レリ

一妾於良ハ遺言ニ因リ十二月十五日愼藏宅ニ引受ケ同居ス就テハ藩主其情ヲ憐ミ扶助米アリ且ツ於良ノ妹(キンメイ)事兼テ龍馬ノ内意ニテ菅野覺兵衞ヘ娶ハスヘキノ約アリ故ニ同女モ姉ト共ニ同居セシム

一明治元年戊辰

王政復古　正月五日中島作太郎來藩訪問ニ預ル時ニ他出シテ面話ヲ得ス一書ヲ遺コシテ馬關ニ到リ泊ス翌日出關會話ス

一海援隊ノ諸士協議ノ上土州ヘ於良引取ノ事ニ決シ終ニ馬關ヨリ土佐ル坂本姉ノ住處ニ護送ス時ニ明治元年三月ナリ

一龍馬ノ遺物トシテ正宗ノ刀ヲ受ク中島氏ヨリ之ヲ贈ルナリ

一後藤氏ヨリモ謝儀トシテ土佐國產ノ美紙ヲ贈ルヲ受ク

○

毛利家乘抄錄

慶應二年正月廿三日藩士三吉愼藏伏水ノ旅舍ニ闘フ

是ヨリ先キ命シテ京攝間ノ情狀ヲ細作セシムルナリ

附記　土佐ノ人坂本良馬曾テ赤馬關ニ來寓シ愼藏之ト交ル是夜良馬ト俱ニ伏水ノ旅舍ニ投ス寇アリ暗ニ舍ヲ圍ム二人樓上ニ在テ之ヲ覺ラス良馬ノ妾會マ浴室ニ在リ變ヲ見テ裸體馳セ報ス數人從ヒ登ル愼藏槍ヲ操リ之ヲ拒カントス敵燭ヲ揭ク其光リ我ヲ射テ渠レ見エス(俗ニ龕燈ト云)槍暗中ヲ鋭ス敵火盆ヲ擲ツ火散シ敵ヲ認ム頗ル衆多ナリ良馬モ亦タ短銃ヲ發シ之ヲ狙ス機輪一回六彈既ニ盡ク再ヒ裝ハントス輪墮ツ之ヲ索ム敵白刃薄リ擊ツ良馬爲メニ手ヲ傷ツク愼藏槍ヲ揮ヒ叫闘シ敵披靡ス良馬モ亦タ隻手銃ヲ裝ヒ追テ階下ニ亂發ス敵死傷シ退ク二人急ニ樓壁ヲ穿チ屋瓦ヲ傳ヒ他ノ二戸ヲ鑽リ遁レテ木材ノ積ム所アルニ會ヒ其架際ニ

潛匿ス敵モ亦タ大炮ヲ引キ再ヒ來テ旅舍ヲ圍ミ二人ヲ索ム獲ス遺ス所ノ一囊ヲ攘メテ去ル時ニ夜已ニ闌ハナリ慎藏曰ク到ル處道路目ヲ以テス逃避術ナシ徒ラニ敵手ニ斃レンヨリハ寧ロ茲ニ潔死センノミト良馬曰ク否然ラス子ハ直チニ當地ノ薩邸ニ行ケ途ニシテ敵ニ遭ハヽ奮死シテ止ムノミ天殆ント白カラントス遲疑スヘカラス予ハ姑ラク茲ニ潛ミ若シ敵ノ踪スルアラハ命ヲ抛タント慎藏其言ニ從ヒ架ヲ下リ竊カニ衣血ヲ川流ニ澣キ弊鞋ヲ拾ヒ穿チ旅客ニ扮シテ辭シ別ル行ク五町許薩邸ノ門ヲ叩キ名ヲ通ス留監大山彦八迎ヘ入レ曰ク昨夜ノ變響キニ良馬カ妾來リ狀ス未タソノ後況如何ンヲ知ルヲ得ス兄今マ此厄ヲ免レ來ル實ニ天幸ト謂ツヘシト乃チ慎藏ヲ邸ニ留メ急ニ舟ヲ艤シ薩徽ノ幟ヲ樹テ壯士兩三名ト共ニ櫓シテ良馬ノ潛處ニ抵リ迎ヘ還リ亦タ邸ニ留ム慎藏佩フル所ノ囊金ヲ悉クシテ良馬ニ投シ醫治ノ資ニ供ス邸監更ニ其門ヲ嚴守セシメ直ニ使ヲ馳セテ西郷吉之助ニ京師ニ報ス吉井幸輔馬ヲ馳セ來リ訪フ俱ニ京畿ノ事情ヲ語ル尋テ西郷氏兵一小隊ニ醫師ヲ附シ來テ二人ヲ療衞セシム留監更メテ新衣ヲ服セシム午後ニ至リ伏水市尹數吏ヲ邸ニ差シ二人ヲ索ム留監誄キ答ヘテ在ラスト爲ス二月朔日幸輔西郷氏ノ旨ヲ承ケ來リ夜ニ乘シテ二人ヲ京師ノ薩邸ニ伴ヒ還ル亦タ護送スルニ一小隊ヲ以テス西郷氏卽チ迎ヘ入レ唔語スル舊識ノ如シ時事ノ得失奏議ノ可否及ヒ志士懇接等ノ談論一モ藴秘スル所ナシ二人居ルコト久シ矣遂ニ薩長兩藩同心協力王政復古ノ準備ヲ謀ルカ爲メ西郷小松桂等ノ諸氏ヲ首トシ各自先ツ疾ク其國ニ歸ルニ決シ二人ヲ伴フテ大坂ヨリ出帆ス三月七日慎藏ハ馬關ニ揚リ良馬ハ薩州ニ向フ八日慎藏勝山ニ復命シ經歷スル所ノ情狀ヲ具ス九日慎藏ニ命シ徑チニ山口ニ抵リ慶親公ニ謁シ時事ヲ上具セシム公之ヲ嘉ミシ親シク新刀一振ヲ賜フ十六日勝山ニ復命ス公賞祿貳拾石ヲ增給ス

追錄　良馬ハ明年十一月十五日ヲ以テ其徒石川清之助ト共ニ京師ニ暗

殺ニ遭フ曩ニ多年勤　王ノ大志ヲ抱キ東走西馳國事ニ鞅掌ス特ニ海軍設置ノ急務ナルヲ慮リ同志ヲ募リテ海援隊ヲ長崎ニ編制シ軍艦ヲ購シテ其術ヲ擴張ス往來必ス馬關港ニ由リ屢シハ有志ニ就キ慷慨時事ヲ說ク公之ヲ嘉賞シ贈ルニ短刀（備前吉光）ヲ以テシ且ツ扶助スル所アリ又タ愼藏ノ家ニ留寓ス淸之助モ亦タ屢シハ來藩ス良馬死スルニ及ンテ遺言ニ因リ其妾愼藏ニ來寄ス愼藏厚ク之ヲ遇ス因テ扶持米ヲ補給ス後チ海援隊ノ諸士愼藏等ト相謀リ妾ヲ土佐ノ國良馬カ姉ノ家ニ護送セリ維新ノ後ニ至リ　朝廷二人ノ生前ニ功アルヲ賞シ其遺族ニ恩祿ヲ賜フ

木戸孝允覺書

幕府ノ書ヲ受ク下田ニ非ス相州クリ濱ナリ
再航相州浦賀ニ至リ遂ニ加奈川横濱ニテ應接セリ
梅田ハ病死ナリ
松陰死士ト上京ヲ謀リ未至發
長井松陰ヲ江戸ニ檻致ス謬聞ナラン梅田源二郎ノ言ヨリ松陰ニ及ベリ
加奈川外三港ヲ開キ商賣ヲ許ス此前年也
長州ノ「初發癸丑甲寅以來攘夷ヲ主張セリ戊午六月廿六日
勅諚下田開港ノ外不差許云々トノ朝意ニ基キ是ヨリ開國ヲ以目的トス雖
然假條約違　勅調印ハ破却シ以テ益名義ヲ明ラカニシ大ニ國是ヲ定メン
ト欲ス依テ壬戌ノ歲幕府ヱ從來名分ノ不明條理ノ不貫ヲ責メ以後　天朝

ヲ遵奉シ其職ヲ盡サンコヲ建白シ而偏ク藩内ニ布令シ士人ノ方向ヲ定メ天倫一等ノ忠節ヲ確守シ一藩ヲ擲チ大ニ國事ニ盡力セント此歳六月六日發江戸道ヲ中仙道ニトリ漸七月四日京都ニ着セリ此途中從者多ク痲ヲ病ミ死スルモノモ亦不少而シテ發江戸ノ前一日嶋津公子東着セリ此時京中諸藩士浪士ノ徒多ク縉紳ノ間ヲ往來シ壯烈ノ議論縱横相行ハレ長州ノ關東ヨリ上ルヲ疑惑シ或ハ長州ノ姦ヲ退クル等ノ議ヲ　朝廷上ニ奉ル者モ頻ニ有之長州京ニ入リ已ニ二十日ヲ過キ未タ一命ヲ奉スルヲ得ズ七月廿九日ニ至リ漸ク八月朔學習院エ參向スベキノ　命有リ依テ上下事ノ齟齬有ランコヲ恐レ廿九日ノ夜孝允當時ノ議奏正親町三條大納言エ强テ謁ヲ請ヒ寡君ヲ召スノ内意ヲ窺フ納言是ヲ語ルヲ難ス依テ將來コノ齟齬アランコ慮リ偏ニ我公ノ誠意ノ貫徹セサランコヲ憂ヒ再三コノ輕重ヲ論シ敢テ内意ヲ窺ハンコヲ請フ依テ三條ヲ示サル其一則今攘夷其二水戸烈公贈官其三天下國事ニ斃レシモノ靈魂招集現存スルモノハ舊ニ復スルノ云々也依テ孝允謹而第二第三二ケ條ノ　朝旨ヲ拜見シ第一攘夷ノ一ケ條ニ至テハ已ニ長州ノ考フル所ト甚齟齬セリ戊午六月廿六日ノ　勅諚終ニ幕府遵奉スル能ハス是ヨリ天下擾々當日ノ勢也長州ノ盡ストコロハ只此朝意ノ貫徹センコヲ誓フ且　朝廷實ニ下田開港ヲ許ス此時已ニ開國ニ決ス而テ　朝廷下田ヲ許スヲ以テ意トセサルモノ有ルニ似タリ一旦下田ヲ許ス今ノ夷狄ハ古ノ夷狄ニアラザルナリ　朝廷先シテ益撻伐ノ規模ヲ定メスンハ有ル可カラズ然ラサレハ天下ノ危又不可知且今日京中壯烈ノ議論縱横相行ハレ縉紳ノ間ニ往來スルモノモ亦少カラス雖然國家ノ事癸丑以來自ラ條理アリ一時壯烈ノ議論ニ媚ビテ多年ノ條理由ル能ハザルモノアリ而シテ孝允主命ヲ受ケ此言ヲ陳論スルニアラザルコヲ陳ベテ一旦辭去シ同志ノ士久坂義介等數名ニ相會シ更ニ當否ヲ論ス皆以テ余ノ言ヲ然リトス依テ又河原街邸ニ至リ諸有司ト君前ニ相議シ一意違ハサルヲ以テ此夜再孝允與參政周布政之助正親町殿ニ至リ改テ前意ヲ陳述セリ八月朔

公學習院エ參向當時ノ議奏傳奏列坐　勅諚ヲ下賜ス謹而拜見スルニ則前ノ二ケ條ナリ是日奉　勅公東下公ハ京都ニ留ル皆　朝命ニ遵フナリ於此又第一條ノ勅意遽ニ不發ヲ疑ヒ深ク將來ノヿヲ苦慮シ而シテ其餘第二第三ノ二條ハ天下ノ末事ナリ第一條ノ可否相定ルヲ以テ天下ノ方向モ定ルト云可シ依テ癸丑甲寅戊午以來ノ　勅諚草野相知ル所ノモノ數條ヲ寫認シ是ヲ奉シテ以テ前途ノ目的トナシ朝意ニ違フ所ナキヤ否ヲ窺フ然ルニ戊午六月廿六日ノ　勅諚ニ至リ今日ノ際云々ノ情實有ッテ最前ノ如ク仰付ラレ難ク雖然國事ノ重大ノ儀ニ付衆議言上ノ上追テ何分ノ御沙汰有ル可クトノ附ケ紙相成（近衛關白殿ニテ評議有之議慮ヲ窺フト云）議奏中山大納言殿ヨリ下受セラレ依テ又大ニ相議シ事今日ニ至リ曖昧模稜日月ヲ消スル時ハ國家ノ正氣ヲ損ス少ナカラス故ニ又仰付ラレ難キノ所以ヲ窺ヒ速ニ可否ノ決ヲ蒙ラント欲シ是ヲ　朝廷ニ陳言スル再三此ニ於テ未ノ歳幕府ヨリ　皇妹御東下ヲ請願公武合一ヲ天下ニ示サントト欲ス而テ　皇妹已ニ有栖川宮エ御内約有リ且關東ハ外夷ノ事情有ルヲ以テ其願ヲ許サレズ幕府百方周旋今日許可ナキ時ハ天下益公武ノ間ヲ危疑シ人心洶々終ニ天下人民自ラ塗炭ノ苦ヲ受ケントス外夷ノ如キハ六七年内乃十ケ年ニハ必掃攘シ可奉安　宸襟可キ云々閣老連署誓詞ヲ奉呈セリ依テ　主上天下ノ億兆ヲ顧慮在ラセラレ終ニ　皇妹御東下其願ヒヲ許シ　宸翰ヲ縉紳ニ示サセラレ事齟齬スル時ハ

朕自ラ是ヲ征スル云々ノ

勅言在リ是ヲ以テ此ノ顚末ヲ示サレ始テ今日仰付ラレ難キ云々ノ所以ヲ知リ而テ幕府未大ニ是ヲ秘シテ人ニ示サズ故ニ始長州ノ幕府ニ意見ヲ論述スルモ至于此皆水泡ニ屬セリ然リ而テ長州ノ上京スル以來天下ノ議論百出不休雖然只條理ノ有ル所ヲ踏ミ以テ今日ニ至リ始テ此ノ顚末ヲ聞キ條理已ニ盡キ條理已ニ極ルト云可シ依テ斷然攘夷ノ　勅ヲ奉ス是ヨリ舉國攘夷ニ決心セリ　皇妹ノ御東下一朝一夕ノヿニアラズ幕府戊午以後又

大條理ヲ失シ天下ノ責ヲ受ケ免レザルモノ于茲基ケリ

櫻田坂下等ノ人名ハ漏ラスニ忍ヒズ

先是毛利家議ヲ幕府ニ献ス云々尤齟齬多シ

長井中仙道ヲ下ル齟齬ナリ

伏水ノ驛ニ留ムルモノ多クハ薩ノ士ナリ

島田左兵衛ヲ斬ル浪士數人ニアラズ薩人田中新兵衛也

中川修理大夫ヲ大坂ニトヽム決テ伏水ニトヽメス此ヿモ亦謬聞多シ孝允モ奉

朝命下坂シテ中川ヲ止メリ

男山行幸ノ役浪士等親征論ヲ逼リ

朝廷慰籍スルヲ聞カズ

長州人清川八郎等ト交ラズ

英人島津家ノ前驅ヲ衝ク此ヿ如何

勅使品川驛ニ駐ラズ此時在江戸

馬關ノ塞堡ヲ修ムルハ攘夷期限發令ノ後ナリ

英艦鹿鹿島ニ至ル四艘ニアラズ七艘ナリ又一艦ヲ沈ム虛說也

長人過激ノ輩大ニ恚テ曰事君側ニ出ルト云々是等實ニ虛說謬傳一モ眞事ナシ十八日ノヿ自ラ元因アリ

先是攘夷期限後長州屢與外國戰フ而シテ今日ニ至リ幕府前日ト齟齬スルノ布令少カラス天下迷惑諸藩モ亦傍觀セリ依テ前年

宸翰ヲ拜見シ

朕自ラ是ヲ征スルノ言アリ條理ノ極ル所ヲ以テ　勅ヲ奉シ今日ノ舉ニ及ヒ而テ天下ノ勢如此故ニ

宸翰ノ

叡慮ニ基キ

親征ノ英斷ヲ以テ

鳳輦ヲ石清水ニ進メラレ天下ニ號令有ラセラレン億兆ノ方向ヲ定メン

コヲ願フ而シテ宸斷望外ニ出ス此ニ於テ會等幕府ヲ征スルノ擧ト疑ヒ
俄ニ九門ヲ鎖シ長州ヲ退ク
格鬪三日云々
十二月乘夜薩州ノ商船豐前田ニ至ル長人眞ニ外國船ト認メ砲擊

屢書ヲ朝廷ニ出ス朝廷省セズ
六月六日會桑及新選組等暴ニ長州人ヲ捕縛シ或ハ擊殺セリ長人大ニ怒
ル孝允等モ此夜旅店池田屋ニ會スルノ約有リ初夜（五ツ時）此屋ニ至ル同志未ダ
來ラズ依テ一去テ又來ラント欲シ對州ノ別邸ニ至ル而テ未經數剋又會
新選組等暴ニ池田屋ヲ襲フ宮部鼎藏吉田年磨等其外此難ニ斃ルモノ十
餘名

先是宮部鼎藏ノ僕ヲ捕エ其ヨリ古高新太郎ニ及ブ宮部ノ僕主人鼎藏ト
古高ニ寓ス當時有志ノ士爾他古高ニ會スルモノ不少（圍外）有志ノ士古高ノ家ニ會スルモノ常ニ十數
人此夜諸士ト會同シ古高ノ縛ラレテ新選組中ニ在ルヲ急襲シテ奪還セ
ント欲スルノ議アリ又尹宮ノ賊ヲ助ルヲ怨怒シ其根本ヲ除カントスル
ノ論アリ囂々不決又長州邸內ノ壯士モ擧テ是ニ應セント欲ス余當時京
都邸內ノ諸士ヲ總管ス依テ余曾古高ト同盟ノモノ三人ヲ選ヒ古高ノ難
ヲ救フヲ許シ其他ヲシテ門ヲ出スルヲ禁ズ于時杉山松助亦邸內ニ有リ
則松助ニ命シ門ヲ嚴ニシ前途亦大事猥リニ此擧ニ應スルヲ許サス松助
ハ此夜變ヲ聞キ余ヲ尋テ池田屋ニ來ラント欲シ途中賊ノ爲ニ斃ル松助
多年勤王ノ志厚ク吉田松陰ノ門ニシテ松陰亦松助吉田年磨等ヲ尤信愛
セリ
池田屋ノ主人縛ラレテ獄中ニ死ス拷問スル甚刻ヲ極ムト云
天王山ニ兵ヲ出ス此ニ基ケリ

屢書ヲ朝廷ニ出ス　朝廷省セズ云々ノミニアラス會○ヲ除カントスル
ノ議論一國尤切迫セリ
七月十九日昧爽直チニ京ニ迫ル
當時因州人屢伏水天王山ニ往來シ共ニ内外ノ〓ヲ通ス（編外五月十七日時山直八ヲ天王山ニ遣ス直八歸京ノ時因州ト一致援擊ノ令ヲ傳ヘリ）于時余則河原邸内ニ在リ邸内ノ士其他諸藩ノ浪士
等七八十人ヲ管ス十八日ノ夕竊ニ率テ因州邸ニ至ル事發スルニ當リ共
ニ有栖川宮ヲ奉シ　闕下ニ至ルノ約有リ是皆本陣ヨリ傳フ所ノ令ナリ
十八日夜因人皆有栖川邸ニ至リ余等ヲシテ叡山ニ登リ諸手ニ應スル〓
ヲス、ム余甚其言ノ出ル所以ヲ怪ミ答テ云今日ノ事成敗不可期只各其
約ヲ守リ其分ヲ盡スニ在リ故ニ苟モ今日ノ令ニ悖ル能ハズ依テ因人先
有栖川ニ至リ時機ヲ窺ヒ報知セン〓ヲ約ス余等一手皆因邸ニ殘ル已ニ
曉天ニ至リ不得一報而テ諸手進入ノ報アリ止ヲ得ス一手門ヲ開テ出ス
于時砲聲已鬱烏丸ノ一手紛亂相混敵彈亂射漸ク此難ヲ凌キ進テ有栖川
宮ニ至ル續テ來ルモノ纔ニ六七人于時彈丸觸
禁闕砲聲如湧因人等余等ヲ見テ大ニ怒テ曰今日ノ事何事タルヤ余於此
テ因人ノ彌違約スルヲ知リ一同決死余從容之ニ答テ云今日ノ〓有約ヲ
以テナリ事コヽニ至リ何ソ賴ムニ足ラント共ニ去テ堺町ニ馳セントス
途ニ鳳輦ノ已ニ加茂行幸有ルヲ聞キ相誓テ
輦下ニ伏シ寃ヲ訴エ死テ遺憾ナシトス而テ相待ツ數刻
鳳輦不出彈丸ノ
禁闕ニ觸ル、ハ尤甚シ小倉右衞門介等揮涙曰此勢實ニ見ルニ忍ビス速
ニ堺町蛤門ノ兩手エ馳セ共ニ戈ヲ倒ニシ
闕ニ至リ伏死セント而テ
鳳輦已ニ行幸ノ〓有リ兩論不決依テ余
鳳輩ニ死シ諸君闕ニ死スベシト諸氏余ヲ殘スニ忍ヒス移時數刻諭スル
ニ大事在前躊躇スヘカラザルヲ以テス遂ニ相別ル而シテ

鳳輦尚未出彈丸益烈空然不堪移時單身又堺町ニ至ル而テ于時長兵敗レ
火鷹司邸ニ起ル故ニ又再朔平門ノ邊リニ歸リ
鳳輦ノ彌出サルヲ聞キ當日
闕下ノ形情ヲ見察シ乘夜天王山ニ至ラントシ伏水ニ至リ天王山ノ兵皆
散スルヲ聞ク淀ニ至リテ其信ナルヲ知リ茫然漸久而テ又入京都始メ京
都ノ兵一敗スル時ハ天王山ニ集合スルノ約有リ而テ紛亂途ヲ各々ニ取
リ皆大坂兵庫ニ下ル而テ京都ニ留ル五日長州追伐ノ議盛ナリ依テ意ヲ
決シ但州ニ至ル但州ハ土民勤王ノモノ有リ前年亦義舉ヲ企テ中途ニシ
テ瓦解スルヿ有リ
先是癸亥八月十八日會薩擁尹宮俄ニ長州
闕下ヲ退逐ス此時長人其外堺町門ニ會スルモノ皆慨然意ヲ決シ會等ノ
罪跡ヲ擧ケ
闕下ニ雌雄ヲ決センヿヲ欲ス而テ
天坐咫尺
勅使柳原等屢來往大夫吉川監物等孝允久坂玄瑞等ヲ招キ慰諭切迫遂ニ
舉軍涙ヲ呑ミ大師エ退陣シ此夜三條卿始七卿ト共ニ長州エ下ル今日
闕下ノ變ヲ聞キ堺町門ニ會スルモノ藤堂彦根熊本其他ノ諸手數千人而
テ時勢ノ益縮迫スルニ至リ多クハ皆知ラサルモノヽ如シ
十月孝允山口ニ歸ル先是藩内俗論沸騰政府殆危シ我　公確乎俗論黨ヲ
貶斥シ示スニ大義ヲ以テス於此政府モ自ラ動搖セズ藩内亦一定セリ于
時京都ヨリ歸ルモノ自若政府ニ列スルモノ有リ京都ノ變不意ニ生スル
ト雖モ元ヨリ孝允等ノ罪過ナリ又長州ノ恥辱ナリ我　公孝允等ノ過ヲ
責メズト雖モ然政府上ニ立ヲ安セズ且今日政府已ニ確乎顧ミル所ナ
シ依テ京都ヨリ歸ルモノ擧テ馬關ニ出デ攘夷ノ兵士ニ充タントス百方
抗論終ニ合セザルモノ有此際公命有リ孝允肥前佐賀ニ至ル十二月萩ニ
歸リ復命シ門ヲ閉テ不出數旬友人高杉晋作公書ヲ懷ニシ來テ孝允ニ示

シ速ニ山口ニ出ルヲ促シ懇言切迫又坐視スルニ忍ス晋作ト共ニ山口ニ至ル而シテ前日ノ論未タ熟セズ故ニ孝允意ヲ決シ藩ヲ脱シ再ヒ上京シ我藩ノ爲ニ盡スヿ有ラントス政府モ我屈セサルヲ知リ公然之レヲ許ス發スルニ望ミ世子公孝允ヲ招キ帶ル所ノ　ヲ取テ之ヲ賜フ于時甲子正月十二日也○此處前段ト復出スルニ似タリ因テ前ニ合シ暫ク後數チ俟ツ採錄者識孝允是ヨリ京都ニ潛伏シ七月ニ至ル天王山ノ敗ニ至リ又皆擧テ共ニ國ニ馳セ我公ノ心志ヲ惱マスニ忍ビス故ニ孝允但馬ニ馳セ長州追討ノヿ有ニ當テハ一報ヲ國ニ投シ天王山敗歸ノ徒ヲ促シ土人ト合シ一擧聊此難ヲ支エントス而テ追討ノヿ決セス遷延ママ月ニ至ル苦心焦慮一日亦如年日ママ影慘憺寒風徹骨慨情益迫切去テ關東ニ至リ武田伊賀等ニ合セントス而テ忽長州征罰ノ說ヲ聞ク四方ノ風說如沸終ニ尾張大納言西下ス於茲一書ヲ作リ竊ニ人ヲ馬關ニ馳ス然而テ長州三大夫ノ首級ヲ出シ謝罪スルノ說有リ允ママ深ク之ヲ恠ミ元ヨリ眞トセズ而テ尾州惣督兵ヲ揚ヲ歸ル續テ又長州激徒沸騰ノ說有リ幕府更ニ諸藩ニ令ス依テ大ニ驚愕シ長州藩內ノ情ヲ想知シ煩念不休而テ馬關ヨリ村田藏六野村靖之介等書ノ至リ近情ヲ詳ニス孝允ノ書ヲ報スル所ノモノ已ニ多クハ黃泉ノ客タリ然リ而幕府尙許サヽルモノ有リ必罰ヲ我公ニ加エント欲ス臣子死守セズンハ決テ此難ヲ凌ク能ハス依テ又京攝ノ間ニ出テ細ニ形情ヲ探索シ遂ニ馬關ニ歸ル而前日敵視セシモノ今ヤ反テ相保護シテ長州獨リ怨ミヲ懷キ前後一ナラザルモノ有ルニ似タリ長州今日一致戴我　公五卿ニ於テ安ゼザルモノ有ル時ハ全國ノ力ヲ盡シ我長州エ迎エザルヲ得ズ依テ衆ニ謀リ後藤新藏ニ托シ一書ヲ條公エ呈ス後藤新藏ハ土州ノ人當時游擊軍ノ軍監タリ曾テ薩兵ト戰ヒ當今ノ形情ヲ詳ラカニセリ條公答フルニ薩藩ノ近情前日ニ異ナルモノ有リ彼ノ善ヲ爲スモ曲テ是ヲ疑惑スル時ハ前途ノヿ甚難シ彼ノ向背ヲ以テ我志ヲ變セサル固ヨリ也依テ允等ニ心ヲ降スヿヲ示サル後藤モ亦具サニ近情ヲ探リ歸テ允ママ等ニ告ク於此皆漸安スルモノ有ト雖人々疑フモノ亦少カラス此後土人坂本良馬長州ニ來

ル始テ此良馬石川誠之介等モ來テ允ニ薩長和解ノㆆヲ促ス前年天王山ノ役兵士各或ハ弓銃或ハ槍刀ヲ携エ其大ニ不利有ルヲ知リ今日ノ機ニ乘シ兵勢ヲ一變セント欲シ其利害ヲ參政山田宇右衞門謀リ大村益二郎ヲ拔擢シ軍事ヲ改正セシム此ニ於テ小銃一萬餘挺ヲ買求セズンハ兵士ニ充ル能ハズ依テ良馬等ニ說クニ現情ヲ以テシ長州四外皆敵而テ薩州天下ノ爲ニ能ク我ヲ容ルヽㆆ有リト云兄等ノ言果シテ眞ナラハ薩名ヲ借リ小銃ヲ長崎ニ求ント欲ス兄以テ如何ントナス良馬等是ヲ托シ終ニ井上聞多伊藤俊介ヲ長崎ニ遣ハシ小銃七千挺蒸氣艦一隻ヲ買求ス先是岩國山口ト合セサルモノ有リ諸隊中モ多ク之ヲ疑惑ス依テ衆ニ說テ曰岩國ハ元本藩ノ連枝ニシテ元ヨリ允等輔佐セザルヲ得ズ雖然今宗家ニ不良ヲ企ツル時ハ共ニ之ヲ糺サザルヲ得ズ今日已ニ敵兵前ニ迫ラントス而テ未タ是非ヲ決セズ徒ラニ遷延スル策ノ上ナルモノニ有ラズ而テ終ニ罰スルノ說ナシ依テ相謀リ三末弁ニ岩國山口ニ會同シ對敵ノ策ヲ定メ去年俗論黨ノ巨魁ヲ誅戮ス於茲藩内ノ物情自ラ定ルモノ有リ外薩州ト合シ内岩國ト和シ兵制ヲ西洋ニ革ルノ三大事件モ於于茲皆行ハレリ

十二月薩州黑田了介余ヲ尋テ馬關ニ至ル談話一日切ニ余ニ上京ヲ促ス此時坂本良馬亦來テ馬關ニ在リ又頻ニ黑田ト共ニ上京ノㆆ論ス而テ余白面京都ニ至リ薩人ト面會スルニ忍セス故ニ他人ヲシテ上京セシメントス而テ高杉晉作井上聞多等亦余ヲシテ上京セシムルㆆヲ論シ終ニ公命下ルニ至ル依テ余恥ヲ忍ヒ意ヲ決シ諸隊中ノ品川彌二郎三好軍太郎早川渡土人田中謙介薩人黑田了介ト同船浪華ニ至ル于時正月四日也其翌同船淀水ヲ沂ル天王山下ヲ過キ慨然流涕セザルモノナシ五更伏水ニ達ス西鄕吉之介村田新八等迎テ共ニ京都ニ入リ薩州邸ニ至ル在留中大久保一藏小松帶刀桂右衞門其外相面會スルモノ數十人懇志甚厚在留殆ニ旬而テ未タ兩藩ノ間ニ關係スルノ談ニ及バス余空ク在留スルヲ厭ヒ

一日相辭テ去ラント欲ス其前日坂本良馬上京シテ余ヲ尋テ來リ兩藩ノ間相誓約スル所以ヲ問フ余答テ曰ク一モ誓約スルモノ無シ良馬甚怡ビス怨然云テ曰ク余等兩藩ノ爲ニ鄉身盡力スルモノハ決テ兩藩ノ爲ニ有ラザル也只天下ノ形勢ヲ想察シ寤寢モ亦安ゼサルモノ有リ然ルニ兄等多事ノ際足ヲ百里ノ外ニ擧ケ兩藩ノ要路互ニ會同シ荏苒十餘日又空ク相去ラントス其意實ニ解ス可カラズ區々ノ痴情ヲ脫却シ何ソ膽心ヲ吐露シ大ニ天下ノ爲ニ將來ヲ協議セザル依テ余答テ曰足下ノ言固ヨリ善シ雖然今日ノ「自ラ元因有リ一朝一夕ノ故ニ有ラス長州始メ天下ノ危ヲ傍觀スル能ハズ寡君則奮然意ヲ決シ大ニ天下ノ爲ニ盡力セントス固ヨリ危難ニ處シ敢テ顧ミルノ意ナシ余等モ亦一意其主旨ヲ輔佐シ萬一ニ報セントス而テ幕府前後反復終ニ觸リ條理ヲ踏テ天下ニ孤立シ今日ノ厄ニ至ル臣子ノ安テ分トスル所ナリ而テ今日薩州ノ地位自ラ長州ト異ナルモノ有リ試ニ之ヲ語ラハ薩州ハ公然

天子ニ朝シ薩州ハ公然幕府ニ會シ薩州ハ公然諸侯ニ交ル自ラ天下ニ對シ公然盡ス所有ル可シ我長州ノ如キハ天下皆敵旌旗已ニ四境ニ迫ル一藩ノ士人只心中ニ安スルモノヲ以テ一死之ニ當ラントス固ヨリ活路ナシ長州ノ立トコロ危險ノ極ト云テ可ナリ而テ長州カ今口ヲ開キ薩州ト共ニセン「ヲ謀ル彼ヲシテ我危險ノ地ニ誘フ言ズシテ自ラ助援ヲ乞フニ似タリ是長州人ノ心トセサル所ロ余甚之ヲ辱ズ薩州　皇家ニ盡ス所有ラバ長州滅スルト雖モ亦天下ノ幸ナリ余決テ口ヲ開ク能ハズ於茲良馬余ノ動カザルヲ悟リ又敢テ責メス而テ薩州又俄ニ余ノ出發ヲ留メ一日西鄉余ニ今日ノ形情ヲ圖リ六條ヲ以テ將來ヲ約ス良馬亦此席ニ陪ス其翌夜京都ヲ發シ浪華ニ下リ留ル數日而テ前ニ約スル所ノ六條前途重大ノ事件ニシテ余ノ謬開有ランコヲ恐レ一書ヲ認メ良馬ニ正ス良馬其紙背ニ六條ノ違誤ナキヲ誓テ之ヲ返ス黑田了助村田新八等數人余等ヲ送テ浪華ニ至リ了助ハ終ニ歸途共ニ藝州ニ至リ其ヨリ又長州ニ至ル而

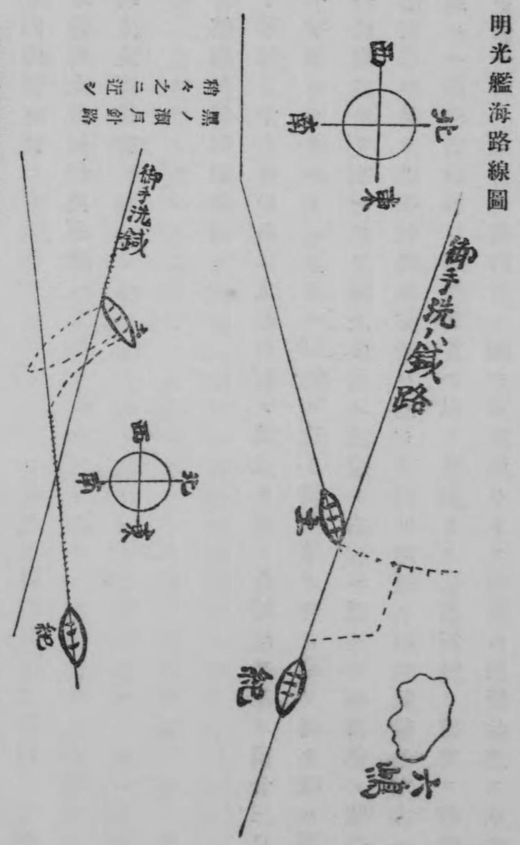
テ長州擧藩必戰ヲ期シ士氣不撓此際薩州ノ我ト通スルヲ擧藩ヲシテ知ラシム知ル時ハ士氣自ラ弛緩センヿヲ恐レ敢テ之ヲ人ニ示サズ獨リ我公ト要路ノ一兩輩ニ告ル而已

丙寅ノ歳四境ノ敵ヲ一掃シ丁卯ニ至リ荏苒年餘幕府ノ形情依舊敢テ自反スルモノ無シ薩藩益奮慨終ニ義兵ヲ　闕下ニ擧ケ以テ幕ノ積罪ヲ問ハントス先是東西兩藩ノ士往來止マス黑田了介ノ如キハ往返前後十度ヲ過ク於茲大久保市藏來テ余ニ此機密ヲ告ク余速ニ是ヲ託ス前年ノ盟約必竟コヽニ基ケハナリ而テ長州京都ヲ退逐セラレ一藩孤立スル已ニ五年此間國難ニ處シ内外鋒鏑ニ斃レ或ハ姦夫ノ手ニ死シ道極テ自盡スルモノ有リ其類指ヲ屈スルニ遑アラズ我　公固ヨリ前後ノ如ク毫モ違フ無シト雖今日四境ノ敵ヲ一掃シ一藩ノ人々自ラ務テ據守ヲ欲シ進戰ヲ樂マズ藩論甚難キモノ有リ誤テ今日機ヲ失スル時ハ天下ノヿ又見ル可カラズ依テ大ニ說テ曰ク薩長兩藩齊シク一薪ノ上ニ坐シ烈火ヲ防カ如シ一藩力ラヲ合セズ傍觀スル時ハ終ニ兩藩相保ツ能ハザル必セリ況ヤ天下ノ回復ヲヤ兩藩戮力速ニ策ヲ決スルニ如カズ且當時幕府令ヲ下シ長州ノ末藩ヲ浪華ニ出サシム自ラ兵ヲ出スニ名有リ百方抗論議論漸決ス而テ尙未熟雖然猶豫スベカラサルヲ以テ斷然大久保ニ答エ以テ死地ニ投セントス此間ノ藩論紛紜苦情謂フ可カラズ而テ國難以來城下ノ士屢方向ヲ誤ル四境ノ戰爭ニ至リ大ニ舊辱ヲ雪キ實戰ノ際ニモ慴ルヽト雖モ諸隊ノ合シテ隊ヲ成スモノ（諸隊ハ士卒農商ノ相）數度國難ニ當リ始終其向フ所ヲ誤ラズ今日國家ヲ維持スルニ當テハ自ラ其功ノ拔出スルモノ有ツテ又隱然威勢モ齊シカラサルモノ有リ然リ而テ全局ノ形勢ヲ望ム時ハ平均ノ勢ヲ失シ中點ヲ誤ルモノ有リ國ノ善ナルモノニ有ラス同士一二ノ長官ノモノモ竊ニ之レヲ憂フルモノ有リ豈ニ慮カラザルベケンヤ依テ此度上國ノ戰務テ必勝ヲ期セスンハ有ル可カラズ而テ强隊ヲ出ス時ハ上國ニ勝

テ却テ國ノ平均ヲ益失スルモノ有リ故ニ熟練ノ長官ヲ附シ城下ノ士ヲシテ擧テ上國ニ出サントト欲ス而テ疑惑ヲ生シ敢テ應セズ依テ又終ニ諸隊ヨリ各一中隊ヲ出スニ決ス實戰上ニ於テハ如此區別スルハ不利ナリト雖モ不得止ノ勢ナリ

いろは丸航海日記

明光艦海路線圖



土佐守内海援隊長
才谷梅太郎紀伊蒸氣船
明光丸應接書

航海日記附錄草稿

慶應丁卯四月十九日いろは丸紅白紅ノ旗章ヲ揚テ長崎港ヲ發ス同廿三日第十一字鍼ヲオーストンソイト（東一點南）ニ取リ讃州箱ノ岬ノ沖ヲ過ク時ニ蒸氣船一艘東方ヨリ來ルアリ檣上白色ノ號燈ト右舷ニ懸リタル青色ノ號燈トヲ右斜形ニ見タリ彼舷進駛右斜ニ回シ我右舷迫近ス因テ我船ヲ左方ニ開ク然ルニ彼船仍右旋シ來リ船首ヲ以テ我右方ヨリ蒸氣室ヲ衝突ス烟筒及ヒ中檣一時ニ摧折ス其響雷ノ如シ潮水混々トメ船腹ニ入船首先ツ水中ニ沈マントス當番士官佐柳高次甲坂上ニ在リ頻リニ彼ノ舟人ヲ喚トモ曾テ應ヘス機關者腰越次郎哨船ノ錨ヲ打掛ケ躍テ船中ニ入ル佐柳高次簿籌

官小曾根英四郎水主小頭梅吉等モ又登ル騒擾ノ際彼自ラ船ヲ退事凡ソ五十間計再進駛シ來テ我右艦ヲ突ケリ始メ佐柳等彼船ニ到リシ時甲板上ニ在ルモノ凡二十人計再三何人ノ船ソト問ヒシカドモ或火役或便船人ナリト更ニ一ロケ（マヽ）ノ士官ヲ見ス由テ彼水手ヲ督促シテ哨船一艘ヲ下サシメ先我便船人ヲ彼船ニ移シ才谷梅太郎モ相次テ到リ彼船長高柳楠之助ニ遇フ於是始メテ紀伊公ノ運送船明光丸ナルヲ知レリ才谷請テ曰兩船等シク公事ニ走ル然ルニ我船獨如此願クハ公ノ船モ又暫此地ニ留メヨ高柳曰君カ言宜ナリ然ト雖モ僕カ事モ又甚タ急ナリ宜先鞆ノ津ニ到リ事ヲ論スヘシト才谷曰諾乃彼ノ哨船ヨリ我船ニ歸リ小谷耕藏渡邊剛八等ト合ヲ水主ニ傳ヘ共ニ明光丸ニ到ル此時月正ニ山頭ニ昇ントス我士官等皆謂フ船ヲ彼ノ船ニ約シ其全沒ヲ拒ント蓋シ我公物ヲ存センヿヲ欲シテナリ然レモ彼衆其一併ニ沈沒センヿヲ恐レテ敢テ許サス又艦中ニ在ル所ノ公物彼船ニ移サント議シ兩船ヲ接近セシメントスレモ彼船運轉自在ナラス終ニ巨索

ヲ以テ是ヲ牽ク牽ル「少時ニシテ全ク沉沒シ唯海水ノ蒼々タルヲ見ルノミ忽開號笛ノ聲波間搖クヲ梅吉金兵衞等泳テ明光丸ニ達ス同乘ノ者皆會ス凡三十四人被傷者三人士官等紅白紅ノ旗章ヲ護シ翌廿四日備後鞆津ニ達ス

海援隊文司
長岡謙吉筆記

（右同六月七日寫於崎陽）

廿三日犯危難之後明光丸ニ移り鞆の湊ニ上陸ス時に

廿四日朝五ツ時頃なり市太郎英四郎に命して士官水夫の宿を取らしむ獨り梅太郎高柳に面會ス（但し高柳ハ明光丸頭取）高柳か曰此度明光丸ハ長崎に船の求め方ニ付て急ニ參らねハ數萬金にかゝわり候事なれハ御氣毒なから此度の論議ハ長崎迄御待被下候や斯申せハ御疑被成候べけれ共申上候事ハ間違有

間梅太郎曰御疑不申上候迚も紀の國を引て遁ケ候事ハ無之候得ハ御疑不申上候私方老主人も急用有て上京夫ニ付て兵器等を日を限て運送仕候事に御座候得ハ船の士官而已申付ても宜候得とも非常の急用故に私を差添上坂仕候惣して此度之義論ハ此處ニて双方士官を出し是非辨しても宜候得とも左樣致し候へハ必爭論難止候へし當時　朝廷之御樣子及幕府ニも いまた長州の義かた付不申其上今年ハ外國人攝海へ定約開湊之申立ニも相成實に　神州の大事此時ニ當りて紀土の爭を生し候ハ尤可恐事ニ在之候間何卒都合宜仕度候然れとも私此まゝ長崎へ歸り唯双方間違より船を失ひしとて主人の急用をかぎ候事ハ實に命の在かきりハ申兼事ニ御座候此危難ハ是非なき事ニ御座候得とも何卒紀州政府之論土佐重役之論の定まる迄ハ御船明光丸を此湊ニ御止め可被下候哉昨夜も海上ニて申上候通りニ御座候此度双方の船とも沈沒いたし候時ハ御同樣ニ上之急用をかぎ候事に御座候高柳か曰厚き御思召難有此度ハ勘定局重役も船に乘組在之

候へハ一同申談御返答申上候當時土佐出崎之御重役ハ何と御申候哉梅太郎か曰後藤象次郎と申候夫ゟ右士官の宿石井町桝屋清左衛門方ニ移る夕方に至りて明光丸士官兩人來ル梅太郎晝寢しけり小谷耕藏面會ス被兩人か曰高柳の御頼ミの如く亦急ニ出帆仕度候へハ御論決の處承たしと申入て歸ル廿五日朝昨夕の兩士來りて吾論決を聞かん梅太郎曰紀州侯は別段重き御家其上御主人の御急用の御事私方ニおゐてハ最早沈沒して跡なき船ニて有之候是を大なる眼を以て見れハ今日ハ無ものハ仕方なけれとも猶存するものハ其用ナランをなす事世間の道理ニも相叶候へく此儀ハ後刻彼道越町魚屋萬藏まて罷出高柳先生御旅宿まて使差出候

昨日より暖々相願候事ハ御聞取被下候や梅太郎曰御尤ニ承候しかし御相談の事ハ誠に相談の御事ニ候得とも私方ゟも相願候事有之惣して私の論ハ外ニ無之御同樣ニ公論を相尋義の有所に順ひ申度夫ゆへ先生よりも何ぞんとなく御申返し可被遣候私ゟも折返して申上候其内自然公論ハ出來可申存候此度の事ハ御船明光丸も俱に沈沒致候得は如何被成候哉御主用をかぎ候而已ならす人命多く失ひ可申候御船ハ長崎へ御廻しニ相成候へハ一兩日おくれながらも御主用ハ相達可申私義ハ要用を被命船を海に沈めしと計ニてハ迚も居られ申間敷然ニ双方士官の當番水夫の小頭の面々ハ長崎ニて義論致候へハ航海者之集る處ニて則公論の是非相顯れ可申候へ共私一身實に困窮仕候へハ猶一ト事御頼申上候故ハ此度出崎仕候事も主人より被命候用物を相辨候ニハ中々手間とれ可申無余義處御隣察被遊紀伊殿の御金借用仕度然れハ御便船相願出崎の上機械早速相求メ主用相達し可申此義相叶候へハ私においても日數少々おくれながらも用向事足り御同樣一ト安心仕候何卒御重役ニ宜御願可被遣候其上ニて双方士官を集て徐々論し公法を照らし私方曲なれハ自然惡處無之若又貴方曲なれハ公法に於ても其所置可有之奉存候上件相願候を約し申せハ兩船の危難ニ明光丸か殘りたれハ此船をして半バ御わかち被下候而も可然かと相願候

事ニ御座候前申候金ハわつかに壹萬余の事にて御座候此儀相叶候事なれハ御便船相願出崎仕度此儀も相叶わす猶御船も此處ニ御止め無之候時ハ最早御相談ニは預り申間敷候此儀御重役へも御達可申遣候樣奉願候高柳か曰御論御尤よく承候得とも何分道中の事御返答申上兼候得ハ猶重役のものども上陸いたし候得ハ早々申達へく其上又御面會も申上候梅太郎曰間違ぬよふ此儀宜御達可被遣候」夫ゟ又右桝屋へ歸る

廿五日夜五ツ時頃高柳楠之助か家來來る則魚屋萬藏か方ニ行ゐ高柳に面會ス時に士官岡本覺十郎成瀨國助側に在り楠之助か曰先刻御申の儀ハ夫々重役の者にも申達候處甚々御尤の御事と申居候得とも唯々何分道中の事其上金持合不申無余儀御斷申上候此義ハ長崎ニて奉行所ニも相達又此地ニ公義御役人御出も相願へく哉然ニ此船の行合の事ハ夫ニも及申間敷候梅太郎曰唯今御申の事ハ私申上候事能御聞分相成候哉今又新たに申上へく候諸君にも御主君の御用向私も主君の用向ニて御座候猶此危難も御

附箋

同意之御事ニ御座候處諸君ハ日數ハ少しおくれながらも上之御用相達し申候私ハ此儘ニゐ出崎仕候へハ兩國之重役立合其上ニて議論相定り候得ハ日數も相掛り主人の急用ニ付て私に命候事は無易の事ニ相成申候共に危難に合候事なれバ今幸に諸君の御船ハなんなく在候事に候へハ其御船にて小弟の危難御救ひ被遣候心積りニて前申壹萬金を御貸被下候時ハ臣下の君を思ふ情御察し可被下候（不明）のにて御座候諸國とも臣の君を思ひ一子の父を思ふは同し御事ニ御座候」高柳及兩士官とも氣の毒なる顏色にて言葉を俱にして曰實ニ御尤の御事御座候先刻承りハ此處ニて金持出候事と存候其儀なれハ早々重役ニ申達候然ルに壹萬金とて正金ニゐハ余程六ヶ敷品物ニて御取被下候哉」梅太郎曰御重役此儀御聞取被下候時ハ右よふの事ハ會計局のものさし出申候惣して金の事を彼是申ハ實にいやな事ニ御座候」高柳か曰其通りニて御座候梅太郎曰其儀も推てハ願不申上候諸君の小弟を御憐被遣候事ハ御談事中ニもよくわかり申候夫計にて私

ハ十分難有奉存候是ゟ先き帛ニ包し金を補之助か懐中ゟ出し氣の毒げに
して重役ゟ心付とて持出し候梅太郎曰御重役の御心付の金子難有候得と
も私荷物ハ皆失ひ候得ともたま〳〵會計役こゝ樣を取出したれハ當時差
かゝり金入用無之候萬々御禮申上候間此金高柳君へ御預り可被下候と申
事再三に及バ高柳又懐中に納む梅太郎又曰御三人の御思召の程萬々難有
御同意被遣候ゑも御重役の御承知不相成事も在之候得ハ決ゑ私ゟの御願
の筋ハ成就仕候事を御心配被遣間敷唯私ゟ申上候義理情實よく御達可被
遣候」　高柳及兩士曰成就御同意申ても何分重役の者も心中ニ計り兼ゑ候
然れハ早々宿に歸り又船にも行詮義仕候しばらく御待可被遣候梅太郎曰
御尤の御事ニ御座候惣して兵卒亡命致候人も諸國に不少候へハ下情上に
不達處ゟの事に御座候」　夫より三士宿に歸る我又宿ニ歸る

附箋　金持合不申云々長崎表ニて云々公儀役人云々の斷高柳先生御覽被下
少々意味相變候處ありとて別に御認被成候間其處ニうつしぬ

廿六日朝六ッ時前頃又高柳の使來ル則魚屋萬藏か家に行高柳岡本在り高
柳曰御賴の事件ハ一々重役ニ申聞候處實ニ御尤の御事と一同申居候然ル
に重役も何分長崎ハ不案内の事故萬一金の立のニも相成候へハ品々手ニ
入可申かと申居候ゆへ何分成尺〻の御世話を申候間其通り御聞取可被下候
梅太郎曰實に御尤の御事御志萬々難有奉存候若御世話被遣候事なれハ長
崎著船之上日數五日の間に御求め被成御渡し可被遣候其求め候品は私方
ニて何々の品何處ニ在之品相求申度と申入れ候間早々御求可被遣候樣相
願度候」　高柳曰何分長崎ハ一同不案内ニ候得ハ何とも申上兼候是ハ長崎
ニおいてあなた御求被成候とて異人ニ引合御付被成候へハ紀州其請人ニ
立可申此義如何御座候哉梅太郎曰御尤の事なから私相求候程なれハ決し
て御賴ハ不申上候高柳岡本曰實ニ御氣の毒ニ御座候得とも何分重役共長
崎不案内ゆへ此處にて御定約申兼候梅太郎曰私相願候事ハ私手ニ入度存

候品を紀州樣の御手にて御取可被成紀州樣の御手より借用仕度との事ニ御座候若其義相不叶ハ夫で宜候間猶出來ねば出來ぬと御重役の御傳聲承度奉存候其上私昨日ゟ御一處に御咄致候事件を書留候間御覽ニ入度如此致さねハ後日ニ至りて御同樣骨折候事も間違も出來可申何れ人情ハ身勝手ニ筆取立のなれハ御覽之上御書入奉願度候高柳曰御尤の御事ニ候今一應重役の者に申聞候間御待可被遣候梅太郎曰難有奉存候高柳岡本成瀨國助等甚々我を憐む事の面外ニあらわれ我又氣の毒に不絶是々先き此度御船の御重役何と御申候哉と相尋候時高柳曰茂田市治郎是勘定奉行ニ御座候」是より又吾宿ニ歸る

上件四月廿四日上陸より此處ニいたる迄認候處を此まゝ勘定組頭清水半左衞門高柳楠之助成瀨國助の前ニ而讀上候へハ廿五日夜の處を高柳の正しニよりて改む其余間違なしと同心ス則廿六日四ッ半時也

附箋

廿六日四ッ時頃高柳使來り則彼魚屋萬藏ニ至ル成瀨國助一人此家ニ止る」國助か曰御願之趣重役の面々一同御尤之御事と存候ニ付而は勘定組頭清水半左衞門御目ニ掛り度候間御役名御爲聞被遣度梅太郎か曰則海援隊長之名札相渡ス夫ゟ福禪寺客殿ニ至ル」清水半左衞門及高柳楠之助在り兩人曰御賴の趣御尤ニ御座候へとも何分長崎ニ而ハ正金都合惡敷其一万余金ハ品物にて御取被下ずや梅太郎曰此度御助被下候へハ双方會計のもの差出相談爲仕候清水か曰此儀ハ右品物ハ何卒先生も共に御周旋可被遣候紀州の長崎用達ハ少々故障在之用向申付かたく候得ハ土佐の御用達へ先生ゟ被命可被下候哉此儀御聞取可被遣候左候へハ其品物ハ紀州に買求可申奉存候梅太郎曰御尤ニ

附箋
高柳此處を見て曰此故障と申上候ハ内々の故障ニて表立ての事には無之候間左樣御承知可被下候

御座候へとも私儀船を失ひしさへ唯ニハ申分ヶ難立候處又出崎の上彼是

と周旋御求被下候事を相願候ハ實にいやにて御座候男兒の心中御察し可被下候扨又御賴申上候事を是非に御聞屆可被遣候とハ不申上候此義ハ唯私の主君を思ひ急用相調度心を盡し候事ニ御座候御世話被下兼候へハ其通り仰被聞候得ハ然れハ此まゝ御別れ申ても私ハ私の分を盡したりと申立のにて御座候御後より長崎へ罷出先生方ゟ土佐へ御掛合被成候とも又長崎重役のものへ御引合被成候とも其御順ハ御心の儘に御座候清水高柳成瀨ともに曰御尤の御事ニ候へとも御身ニ成變りて勘定奉行にも申聞候間暫時御待可被下候事成就仕候得は俗事のもの彼魚屋萬藏まて遣し候間御船の俗事方も御引合申度候梅太郎曰早速指出し申候夫ゟ又桝屋の旅宿ニ歸る

廿六日夜五ッ半頃成瀨國助及俗事役一人來ル成瀨曰御賴の金子ハ御用立可申樣重役共ゟ申被聞候然は乍失敬御差出しの案を認候間御覽可被遣候梅太郎曰拜見可仕候其文ニ曰云々國に難歸甚難澁仕候間此度船の事に不

抱長崎ニおいて返濟の期限相立御貸可被遣云々梅太郎曰返濟之期限相立候事ハ出來申間敷候其故ハ私ハ主人の要物を失ひ其上船も如此相成候事ニ御座候私事罪ある身に在之候云々返濟之期限相立候得ハ必噌ニて御座候國助曰惣して物を貸に期限なしと云事ハある間敷候梅太郎曰此度の私の船ハ如此御船ハ幸に殘り候へハ夫をハ半御わかち被成候御心にて御救ひ被成すやと申事ニ候其期限ハ相立不申とても彼船の義長崎ニて仕候時ハ拜借仕候金の分離ハ付候事ニて御座候國助色を改めて曰夫ハ昨日以來の御論とハ意味變り候兼而承候處ハ船の事ニかゝわらずして金御借用被成事と存候梅太郎曰少しも意味かわり候事無之候先昨日より御談仕候處を認候て先刻御覽ニも入候書取御覽可被成候ト云なからイロハ九日記付錄を出ス國助曰其義なれハ壹度歸り相談仕候梅太郎曰宜敷御賴申上候

附

○前申述候通り金高用意無之依て滯船之上双方重役出張迄相待筈ニ候得とも右出張とても當湊ニ而ハ落著付間敷自然公裁を請候節は公

儀役人この處に出張致間敷歟尤洋中ニて不時相起候事ニ付當湊ニ限る譯も有之間敷長崎湊ハ各國の船出入も多き義ニ付類例も可相分候旁長崎奉行所へ申立公裁を請候方ニ可有之存候而御人數明光丸ニ乗組長崎表へ御越し被成候樣致度候事

右廿六日高柳先生の前ニて吾認候處を正して變り候處を記ス

清水牢左衛門
高柳楠之助
成瀨國助

上件認候時勘定組頭明
光丸頭取同士官右三人
共同見ス

箋

廿七日朝五ツ前高柳使來ル又魚屋ニ至ル梅太郎曰昨夜成瀨兄御出難有候扨又昨夜御談申上候所及廿六日より御面談仕候處を又書認候間御覽可被遣候とて航海日記付錄を指出ス高柳曰拜見仕候相違無之候梅太郎曰金拜借仕候處ハ御同樣恩を思ひ急用事かき不申樣に御憐察被遣度との御相談ニ候處返濟之期限相立申べしとの御事ニ候長崎ニおいて返濟之期限相立時ハ必請人御入用ニ可有之候其請人とてハ土佐重役之者に可有之候哉或ハ請人相立候程なれハ何そ紀伊侯の御手をあをき可申哉異人ニ借候事ハいと安き事ニ御座候高柳曰御返濟之期限相立不申時ハ國本へ御貸申名が無之候間是非ニ不及御斷申候梅太郎曰夫で强てハ申上ず候然ハ今日出帆可被成哉御願申上候ハ土佐商會之會計之者在之候此者ハ私兼而召遣候人ニてハ無之候得とも荷物を失ひし事ゆへ早々長崎へ歸り度候高柳御談申候然れハ出帆仕候梅太郎曰御心次第ニ而御座候是ゟ宿處ニ歸る

一日佐柳高次腰越次郎才谷ニ謁シテ私共今日ヨリ長ノ暇ヲ賜ワルベシト云才谷其故ヲ問ヘ𪜈不答强テ問フ二人曰明光艦士官等我船ヲ乗沉メ應接振不禮甚敷誠ニ憤恚ニ堪ヘス候因私共二人直ニ彼船ニ躍リ込乗組ノ奴原ヲ薙快ク割腹仕度候右ニ付隊中ニ罷在候テハ御迷惑ノ筋モ可有之ト存シ御暇願出候何卒御差許シ可被下ト頻ニ懇請シタリ才谷曰其元ノ願フ所誠

ニ尤千萬候ヘ𪜈此地ニアツテ論辨決セズンハ長崎ニ趣徐ロニ論辨シ天下ノ公論ヲ以テ所置スヘシ紀親藩ノ權ヲ恃ンテ我ヲ凌侮ストモ我何ソ彼ヲ恐レンヤ必ス條理判然彼ヲシテ屈伏セシメン若屈伏セスンバ其時其元ノ言ニ從フ𪜈未遲カラサルナリ唯々心ヲ平ニシテ我指揮ヲ待申ベシト論セシニ二人感憤シテ敢テ發セサリシト云

夫ヨリ便船人手廻リ荷物等沉沒セシモノヲ夫々紙面ニ爲致候上各之意ニ任セテ散在セシメ水夫等〻卒ヒテ馬關ニ到リ馬關ヨリ官船ニ乘テ五月十三日長崎港ニ達ス

五月十五日紀土兩藩船士長崎ニ會シイロハ丸沈沒ノ事ヲ論決ス海援隊文司長長岡謙吉側ニアリテ之ヲ記ス

一土云方今開鎖ノ議未決セス天下紛々患内外ニアリ沈沒ノ事ヨリ互ニ爭端ヲ生スルハ万々アルヘカラサルノ〻ナリ唯理明カニ義詳ニシテ決論ノ上ハ万國ノ公議ヲ以テ決スヘシ

一紀云固ヨリ徐々ニ談論義理詳明ニ至ランノミ

一土云言頭ノ論ハ日後證左トシ難シ互ニ航海日記ヲ交換シ其書ヲ推テ一々精論スヘシ

一紀然リ

因テ互ニ航海日記ヲ換シ而後論難ニ及フ紀ヨリ出セルモノニハ略圖アリ符號ヲ以テ船路方向ヲ指ス圖線卷首ニ出ス卷末ニ圖符ト稱スル者ハ則是ナリ土云航海日記抜書ト船中用ユル所ノカールトニ由テ論難ス抜書兩ヲ別ニ存ス

紀藩列席

高柳楠之助
岡本覺十郎
成瀨國助
福田能楠

岡崎桂助
中谷光助
上西米藏
尾崎十兵衛
中崎市右衛門

土藩列席

才谷梅太郎
小谷耕藏
渡邊剛八
長岡謙吉
佐柳高治
腰越次郎
森田晉三

一紀圖ヲ按シテ論シ云我船ハ航海ノ定則ニ由テ圖線上ヲ走リ而ルニ貴方ヨリ走テ六島ニ向フ我之ヲ右ニサケント欲シ船ヲ右廻スレ𪜈貴船仍六島ニ向ヒ進ミ來リ我船ニ迫近ス故ニ遂ニ左廻ス其時貴船仍進來ル故ニコノ難アリシナリ

一土圖ヲ按シ答テ云是衝突ノ難アル所以ナリ我右舷ノ青燈ヲ認メテ既ニ替リタルヲ知ル而貴船右旋シ來テ忽左廻ス我左避スレ𪜈及ハス因テ此難有シ也

一紀ノ水先長尾云初メ我漁燈ナルカ商船ナルカヲ辨セス既ニシテ蒸氣船ナルヲ知ル因テ右廻シテ左舷ノ赤燈ヲ認メシテ避ントス而貴船愈益進ミ來ル故ニ此難アリシ也

一土ノ當番士官云何ソ赤燈ヲ出シテ他船ニ示スヲ煩ハサンヤ唯定則ニ由テ船ヲ進ムヘキナリ且君云初メ漁火カ商船カヲシラス近ニ及テ急ニ避

橋本麒之助

ントス是此難有所以ニ非スヤ何ソ定則ノ鍼線ニヨツテ船ヲ行ヲヿヲセサル

此時紀ノ成瀨出來リ左樣ニテハ有マシ燈ノ漁火カ商船カヲ知ラサルハ遠方ヨリ見シ時ノヿニテ近ニ及ンテ見シヿニテハ非ルヘシト云シナリ

一土云我船御手洗ノ瀨戸ヲ拔ケ鍼ヲオーストンノンソイトニ取リ直路ヲ走ル故ニ南方ヨリ廻リ六島ノ方ニ向フヘキ理ナシ貴方ノ圖線甚タカヘリ

一紀云然レ𪜈南方ヨリ六島ニ向ヒ來リシナリ故此難有リシ也

如此互ニ爭難スレ𪜈理非分別シ難シ云ノ才谷云今船路ノヿヲ互ニ相辨論スルトモ海上ニ證跡無シ遂ニ決シ難カルヘシ暫ク之ヲ置ン

一紀云然リ

一土云再ヒ船ヲ進メテ我船ノ右艫ヲ衝シハ如何

一紀云大艦ハ運轉ニ自在ナラス衝突ノ後愈君ノ船ヲ壞センヿヲ恐レテ少シク退ケシカ速力加ツテ大ニ退タリ故ニ再ヒ近傍ニ到テ相助ント欲セシニ誤テ右艫ニ當タリシナリ故意ニ衝突セシニハ非ス

一土云曩ニ示サルヽ圖錄ニモ左右ノ舷燈ナシト云ヘリ其事ハ既ニ昨日モ論辨セシカトモ我士官ハ勝房劦公ニモ從學シ外國ヘモ到リシ者ニテ航海ノ規則ハ略了知セル者ナリ然ルニ左右ノ舷燈ヲ點セスシテ暗夜ニ船ヲ行ルヘキ理ナシ甚怪ムヘシ願クハ其確證ヲキカン

一紀云其時前田岡崎ヲシテ貴船ニ到ラシメ水夫ニ似タル者ニ遇フテ舷燈何ニアリヤト問シニ其人舷燈ハナシト答ヘリ

一土云是答ヘタル者ノ姓名ハ如何

一紀云記セス

一土云應答セシ人ノ姓名ヲモ記セス確證ト爲シ難シ

一紀云然リ

一紀問云大船ト小船ト海上ニテ相遇フトキハ小船ハ運轉自在ナレハ避ヘキ理ニ非スヤ

一土云既ニ檣上白色ノ號燈ト青色ノ號燈トヲ見テ既ニ船路ノ替リタルヲ知故ニ小船ハ大船ヲサクルノ理論ニ關セス

一土云最初船著行當リシ時ホールヨリ我士官等四人躍テ貴船ニ到リシカ左右ニ點燈モナキ船ヨリ上ルヘキ道ヨリモ上ラスシテホールヨリ妄リニ上ル者ハ救フヘキハ救ヒ責ムヘキハ責ムヘキニ誰ソヤトモ問ハサリシハ如何且シキリニ誰船ソヤト甲板上ノ人ニ問ヘトモ答ヘサリシハ如何

一紀船長高柳云突當ルヤ否予自ラ甲板上ニ登リ哨船ヲ出シテ救ヘト命シタリ故ニホールニアリシ者ハ予カ令ニ從ヒ哨船ノ「ニ掛リテホールニハ少ナカリシモノナルヘシ且其際ノ騷擾筆舌ノ及フヘキニ非ス或ハ貴船ノ人ヲ救フニ急ニシテ認メ得サリシカモ知リ難キナリ且云其時ノホ

ール當番ノ者此席ニ在ラサルカ故ニ卽答シ難シ

一才谷云昨日予橋本ト拜顏ノ時明日ハ危難ノ一條ヲ精細ニ論辨シテ世界之公法ニ處スヘシト互ニ約セシニ其論判ニ尤關セル者ノ來ラサルハ論決ヲ遲延セシムルニ似タリ高意僕ニ在テ解シ得ス

一高柳云今日ハ唯船路ノ大體ヲ談セント欲セシ也

一紀ノ水先當番云最初ニ我傳五郎ヲ見タリ他人ヲ見ス

一土云傳五郎ハ足痛ヲ憂ヘテアリシ最初ニホールヨリ登ルヘキ理ナシ

一又云船當ルヤ否飛上リタル者ヲ硝船ヲ下ロセトノ命ヲ聞テホールニハ非サリシナルヘシトハ誠ニ曖昧ノ語ナリ點燈モナキ船ヨリ妄リニ飛上リ來ル者ヲ認メサル程ノ者カ當番水先ヲ爲スハ何ソヤ我之ヲ問フ所以ハ之ヲ見タルヤ見サルヤヲキカン

一紀ノ水先云其時ニハ傳五郎ヲ見シノミ他人ヲ見ス

一土云然ラハ甲板上ニ當直ノ士官在ラサリシヲ知ルヘシ當直ノ士官アラ

スシテ水夫輩ニ命シテ暗夜ニ船ヲ行カシム奚ンソ如此危難ニ到ラサル
ヲ得ンヤ
兩藩士ノ辨難此ニ盡ク而シテ條理錯雜理非分明ナラス恐ラクハ紛々
要ノ者ヲ摘出シテ一證紙ヲ作ル其文ニ云
慶應丁卯四月廿三日紀伊公之蒸氣船我蒸氣船ヲ衝突ス我船沈沒ス
其　證
衝突之際我士官等彼甲板上ニ登リシ時一人之士官有ルヲ見ス是一ケ條
衝突之後彼自ラ船ヲ退事凡五十間計再前進シ來ツテ我船ノ右艙ヲ突ク是
二ケ條
五月十六日海援隊文司長岡謙吉應接席上ニ於テ書ス列坐ノ士皆見之
拜誦如貴諭薄暑之候御坐候處倍御清康奉賀候然ハ才谷梅太郎いろは丸航
海日誌付錄寫御家ニ於テ御入用ノ趣御紹介御座候處乍御面倒別冊御手許
ヘ差出候條可然御執成ノ義御依賴申上候其來歷ハ左記之通ニ御坐候且又
過日樫尾君へいろは丸乘船中日記ノ拔抄提出仕出候定テ御一覽被成下候
事ト相信候然ルニ左記ノ點寫シ漏發見仕候間可然御記入被成下度併テ御
依賴申上候右ハ直ニ御報旁提出可致筈之處家事上混雜ノ義有之夫カ爲遲
延不惡御宥恕被成下度奉翼候乍末筆時下御自愛專一ニ奉祈候匆々敬具
一才谷梅太郎紀伊蒸氣船明光丸應接書ナルモノハ當時長崎出張ノ土州藩
士ヨリいろは丸船將ニ對シ明光丸トいろは丸衝突セシ際ヨリ紀土兩藩
士間於テ應接ノ顚末ヲ報告ノ爲ニ幾回ニモ該應接書ヲ回附シ來リタル
モノヲ騰寫セシメラレ其都度我輩共ニモ回覽ニ附サレタルヨリ一覽每
ニ不肖ガ謄寫シ置タルモノヲ纒メテ一冊トナシタルモノナリ故ニ自然
尙脫落セシヤモ難測素ゟ拙筆誤字多シ宜ク御判覽ヲ仰ク

但紀州藩士高柳楠之助氏ハ明光丸船將ニ非ス紀州藩ノ重役ナル由ニ傳聞セリ當時長崎ノ紀州藩用立商人が不正ヲ働キタルヿ發覺ノ爲ニ取調トシテ出張ノ途中ナリシトノヿナリ應接書中ニモ急用アリテ長崎ニ下ル云々トアルハ此ヿナリ

○

一日記寫中國島氏自裁ノ爲ニいろは丸出船不可能トナリシヨリ玉井俊次郎氏ガ長崎ニ滯留セラレルヿトナリ氏ハ次航海著船迄其儘長崎ニ滯在セラレタルモノナリ

一國島氏ノ割腹ハ胸下ニ突キ疵アリ咽喉ヲ三刀左ヨリ右ニ掻キ切リ居ラレタリ

但仰合ニ非サレタル儘ノヿナリシモノナリ

右可然御記入可被成下候

五月卅日

村上様　玉机下　　豐川渉

拜啓特ニ暑氣ニ向はんとする氣候ニ候へ共愈御健昌御勤務之段奉大賀候降テ迂生無事消光候間乍他事御放神被下度過日ハ御職務之爲メ御出松之旨傳聞候へ共折柄御宿所ヲ聞漏シ乍遺憾御不沙汰申上候扨テ前會之問題トナリシ（いろは丸）一件郡中在豐川士ニ就キ去ル十七日依賴候所早速別紙之通リ送付致貰ヒ候ニ付御回送申候條尚御不審之廉ハ松田士等ニ據リ爲御聞合相成候ヘバ如何ト愚考仕候間爲念申進候且今會ハ小生事も都合上出會致シ得サルニ付老人會員諸君へも可然御鶴聲奉願候尚幾重ニモ御盡力著々進捗之義切望仕候何れ他事ハ御面談之節と匆々不具

五月八日

村上是哉様　　樫尾調藏

尚時下御自愛専一ニ相祈

拜啓晴和御同慶奉存候陳ハ過日ハ御來訪被成下奉謝候其刻被仰聞候いろは丸一件老生當時ノ記事ヨリ別紙之通抄寫仕候得共御了知被成候身分特ニ海員トシテ乘船ニ付重要ノ點ニハ關係不仕何等御參考ニモ相成間敷愚案仕候得共折角ノ御示諭ニ付御手許迄差出候尚篤と御賢考之上可然御取捨御取計被成下度偏ニ奉冀候乍末筆時下御自愛専一ニ奉祈候匆々敬具

四月廿二日

樫尾様　　豐川渉

玉机下

いろは丸終始顚末

豐川渉日記抜抄

慶應二年六七月頃國島六左衞門氏ニ井上將策氏ガ隨從シテ軍用小銃購入トシテ長崎ニ出張ニナツタ國島氏ハ豫テ某々二三ノ同志ト謀議ガアツタモノト見エテ薩州士五代才助氏ノ周旋テ長崎出島ニ商館ヲ構ヘテ居タ「ボードイン」ト云フ和蘭陀人ノ所有蒸氣船長サ百八十尺約四百五十頓六十五馬力大洋中航海ニハ帆ヲ用フルカ故ニ三本檣ノ鐵船ヲ船價約三万圓デ買受ノ契約ガ成立ツタ然ルニ大洲藩ノ廳議ヲ經タモノデナイカラシテ大洲藩船ノ名義ニスルコトカ不可能デアル(當時ハ蒸氣船所有ハ各藩ニ限ル)故ニ薩摩藩ノ船トシテ檣頭ニ白地ニ黑ノ轡ノ紋ノ旗ヲ揭ケテ其海員ハ土佐ノ浪士坂本龍馬(才谷梅太郎)氏ガ隊長ノ長崎龜山隊中カラ山本謙吉(實ハ土佐ノ藩士菅野覺兵衞)柴田八兵衞(實ハ越前ノ浪士渡部剛八)橋本久太夫野村幸治郎(共ニ幕府軍艦ノ脫走者)等ノ諸氏ト國島井上兩氏カ乘組デ同年九月

ニ長濱港ニ著船シタ時恰モ好シ大洲君侯ガ江戸表カラ御歸國ノ折柄テ其御召船ヲ曳キ運轉ノ自在ト速力トヲ親シク君侯ノ御覽ニ入レルト云フ計畫テアツタガ夫ハ從來ノ漕キ船カ無用ニナツテ舟子ノ者ガ失望スルト先例ニ背クト云フ處カラ御廳許ニナラナイノデ青島沖カラ態ト御召船ノ前面ニ進ンデ忽チニシテ後退シ其運轉ヲ止メ御召船ノ通過ヲ待チ再ヒ前進シテ御召船ヨリ遙カニ先キニ長濱港内ニ投錨シ夫カラ數日間碇泊シタ其間ニ國島氏カラ密使カ來テ窃カニ船中ニ同行シテ國島氏ニ面謁シタ實ハ其折ニ追テ乘船ヲ内約シタノデアル船ハ其儘長崎ニ滯航シタ同年十一月ニ至テ正面大洲藩ノ所有船トシテ檣頭ニ赤地ニ白ノ蛇ノ目ノ紋ノ旗ヲ掲ケテ長濱ニ歸港シタ余ハ同月十二日命セラレテ同十四日ニ乘船シタノデアル

長崎デ船名ヲ改メテいろは丸トシタ時ニ「ボードイン」ガ國島氏ニ向ツテせ゜ず゜迄ヤレ〳〵ト云フタトノコデアル夫迄ハ「アビソ」ト云フタ「アビソ」ハ和蘭陀ノ美人ノ名デ其美人ノ像ガ船尾ニ彫刻シテアツタ「ボートイン」ガ船ヲ引繼テ通船ニ移ツタ時ニ其像ニ對シテ「アビソ」サラバト云フテ泣ク眞似ヲシタトノコデアル

十一月十四日ニ役員ガ悉ク乘船ニナツタ左ノ如シ

船將　松田六郎　玉井俊治郎　一等士官　簑島利兵衛

二等士官　井上將策　井上謹吾　後藤亮一郎

俗事方　豐川覺十郎　同下役　和泉屋金兵衛　播磨屋源助

運用方　橋本久太夫　機關方　山本謙吉　柴田八兵衛

小頭　木村傳五郎以下水夫十七人小頭篠原力松以下火夫廿人機關見習トシテ喜多山半兵衛運用方見習トシテ大江益之進同長濱大船頭ヨリ西村榮安部亮之助機關油指見習豐川嘉一郎其外長濱御船手ノ者六人生晒蠟、木附子、松板等ヲ搭載シテ同十八日出船ト決シタ大洲藩船ニナツテノ初航海デアル然ルニ十七日ノ夕刻長濱町ノ某割烹店デ水夫ノ和助ナル者ガ藩士ノ

大庭三右衞門氏ニ斬殺サレタ爲ニ出船カ延引ニナツテ同十九日朝七ツ時(午前四時)抜錨シテ長崎ニ向ツテ航シタ

但當時長州藩ガ國難中デアツテ關内海狹ヲ通過スルヿハ藩ニヨツテ危險テアツタ松山藩ノ如キモ太胡丸ト云蒸氣船ガアツテ長崎カラ東回リヲシテ居タガ大洲藩ハ何等ノ故障モナク下ノ關ニモ自由ニ上陸カ出來タノデアル

同月廿二日朝五ツ時(午前八時)長崎著積荷ハ漸次ニ陸揚ケシテ石炭其他ヲ搭載シテ後出船ガ決定セヌ爲ニ徒シク碇泊シタ稍ク十二月廿五日出船ト決シタ處カ其朝トナツテ遽カニ延引ニナツタ其實國島氏ガ突然割服セラレタ故デアルヿガ窃カニ少數者ニ知レタ

但恩人國島氏ノ自裁ニ就テハ遺書モナク誰モ事情ヲ知ル者ハナカツタガ既ニ一ケ月余モ徒シク碇泊シタルモ實ハ金融上カラ出船ノ運ヒニナラズ幾回モ出船ノ延引ヲ重ヲタ末年末ノ廿五日ト發表ニハナツタモノヽ氏カ數百圓ノ責任ヲ負フテ居ラレタトノヿデアル氏ハ前航海カラ長崎ニ滯在シテ居ラレテ此航海ニモ乘船ハセラレヌ筈デ井上將策氏ト共ニ下宿ノ二階ニ一間隔ニ就寢中廿五日ノ雞明將策々々トノ聲ガ井上氏ノ寢耳ニ入テ驚キ覺テ國島氏ノ室ニ入ツタ時ハ仰向ニナツテ鮮血淋漓タル手ニ短刀ヲ振リツヽ煩悶シテ居ラレタトノヿデアル事件ハ最モ秘密ニシテ二階ノ上リ口ニ番人ヲ附シテ大洲人ト雖トモ特別關係者ノ外ハ出入ヲ拒絶シテアツタ然ルニ如何ニシテ知ツタカ坂本龍馬ト五代才助兩氏カ來ツテ坂本氏ハ國島氏ノ死體ヲ檢シ胸下ノ刀痕ヲ己ガ指頭ヲ以テ探リナドシテ武士タルモノガ己ノ所存ガ成立チバ死ヌルノ外ハナイ嗚呼一知己ヲ失ツタト嘆息シテ辭シ去ツタ死骸ハ其儘白金巾デ包ミ絹蒲團ノ儘箱ニ納メ石灰詰ニシテ國島六左衞門小銃入ト箱ノ表ニ記シテいろは丸ノ甲板ニ運ンダ小銃購入トシテ長崎ニ出張シテ蒸氣船ヲ買入夫カ爲ニ斃レテ己ガ小銃トナツテ

歸ラレルトハ如何ナル因緣ゾヤ尤關係者ノ外ハ船中誰一人其實ヲ知ツタ者ハナカツタ故ニ其儘小銃トシテ翌年正月二日ニ大洲ニ送ラレタ

同廿六日出船三十日長濱歸港船將始メ悉ク上陸船中ニ居殘リタルモノハ大洲人ハ御船手中ノ四五名ト余トノミニナツタ

此時彼ノ人體模形(キンストレイキ)長崎カラ積歸ツタ該品ハ佛蘭西製デ未タ日本ニ三個ノ外ハナイト云フ貴重品デ是モ國島氏カ豫テ購入シテ置カレタモノデアル

慶應三年正月廿日出船長崎ニ航ス船將大橋采女士官神野官太夫高橋助右衞門俗事方小野充之助海員運用方代理木村傳五郎機關方柴田八兵衞其他ニ長濱ノ大塚明之助氏ガ乘ツタ氏ハ是迄幕府ノ軍艦ニ測量方トシテ乘組デ居タノヲ呼戻サレタノデアル余ハ機關見習ニナツタ積荷ハ又蠟木附子板等ノ外尙醬油ヲ積ム爲ニ宇和島ニ回船シテ同藩士ノ便乘モアツタ同月廿七日長崎著石炭或ハ輸入白砂糖等ヲ積込二月七日出船同十日未明長濱ニ歸港ス同十七日出船兵庫ニ航ス船將玉井俊次郎士官田垣愼六兩氏ニ交代翌十八日朝兵庫ニ著船然ルニ前日長濱港內ニ投錨ノ際誤テ突堤ニ衝突シタ破損ヶ所修繕ニ日數ヲ要シ稍ク三月廿八日淸酒其他ヲ積入出船四月朔日長濱歸港今回始テ船將士官其儘俗事方ガ井上勘助氏ニ代ツテ同五日出船同八日長崎ニ著シタ然ルニ土佐藩士後藤象二郎氏カラノ交渉デいろは丸ヲ大坂ヘ一航海同藩ニ貸渡スコトニナツテ龜山隊ハ(長崎ノ龜山ニ屯集シテ居タ故ニ龜山隊或ハ龜山社中ト云フ)坂本龍馬氏ヲ始メ社中ノ面々乘組同月十九日ニ出船シタ乘組員中大洲人ハ長濱ノ御船手ノ水夫見習ノ外ハ悉ク上陸シテ市中ニ下宿シタ然ル處同月卅日ノ朝薩州ノ用立商人小曾根英四郎ナル人ガ突然來ツテ去ル廿三日夜半鞆ノ津ヲ距ル約六里ノ沖合デ紀州蒸氣船明光丸ト云フ大船ト衝突シいろは丸ハ間モナク沉沒セリ幸ニ死者ハナキモ負傷者四人アリ坂本氏ヲ始メ一同ハ和船デ後カラ歸著ノ筈ナリ拙者ハ直ニ出發シテ只今

歸レリトノ意外ノ報告ニ一同大ニ驚ク就テハ井上勘助氏ヲ大洲ニ歸サレルヿニナツタ氏ハ直ニ出立シタガ途中デ邂逅シタトノヿデ五月十日大橋采女氏ガ小野充之助氏ヲ隨エテ著サレタ以來土州藩トノ交渉ヲ開キ夫ガ六月十一日ニ纒ツタ如斯日數ヲ經タノハ土州ト紀州間ノ談判カ解決セヌ爲デアル同十六日出立陸路一同引拂フヿニナツタ余ハ田垣氏ト共ニ尙殘務ヲ處置シテ同十九日出發島原カラ肥後ニ渡リ豐後ヲ經テ歸宅シタ

但いろは丸衝突ニ就テハ鞆津以來長崎ニ於テ坂本龍馬氏ト紀州藩士高柳楠之助氏等トノ間ニ談判ヲ開クヿ數回テアツタガ何分當時ハ未タ航海規則カナイ處カラ所謂水掛論デ結局外國人ノ比判ヲ請フタ末明光丸ノ曲ニ決シテ土佐藩ハ紀州カラ四万幾千圓ノ償金ヲ得テ大洲藩エハいろは丸原價ノ壹割引ノ代金ヲ年賦デ償フヿニナリ其幾分ヲ同年十月ニ受取ルヘキ筈從テ蘭人ニ支拂船價ノ殘金モ十一月ニ拂渡スヿニ契約ガ成立タトノヿデ其扱ハ五代才助デアツタ尤いろは丸貸渡

ノ際後藤象二郎氏カラ萬一ノ場合ハ汽船ヲ以テナリト現金ナリト望ニ應シテ辨償スヘシトノ證書ガ取テアツタトノヿデアル土州藩ニハ横笛、胡蝶、夕顔等ノ蒸氣船ガアツタ故ニ定テ其内ノ一艘ヲ代船ニ申受ケニナルデアラウト余等ハ幾分ノ望ヲ存シテ居タノデアツタ實ニ國島氏カ生命ヲ賭セラレタいろは丸ノ最期ハ悲慘ナモノデアツタ紀土談判ノ詳細ハ

航海日記附錄　土佐守内海援隊長才谷梅太郎紀伊蒸氣船明光丸應接書ノ寫カアル

坂本龍馬海援隊始末一

自天保六年己未十一月
至慶應元年乙丑十一月

土佐　坂崎紫瀾編

夫レ海援隊ナルモノハ維新前土佐ノ人坂本龍馬ガ當時脫藩者ノ同志ヲ以テ組織スル所ノ一團體ナリ而シテ當初ハ隊名ヲ有セス單ニ「社中」ト稱セリ其ノ海援隊ト號セシハ實ニ土藩ノ附屬タリシ以後ニ在リ抑モ坂本ハ彼ノ武市半平太ヲ首領トセル土佐勤王黨ノ一劍客タリト雖モ夙ニ開國ノ思想ヲ養成セルモノアリ乃チ他日勝安房守義邦ノ海軍論ニ心折セル固ヨリ一朝夕ノ故ニ非ス故ニ今本編ヲ草スルニ臨ミ坂本ノ鄕里ニ在リシ時ノ事情ニ溯リテ之ヲ叙セサルヲ得ズ卽チ玆ニ一言シテ先ツ讀者ニ告クコト爾リ

一天保六年己未十一月十五日坂本龍馬土佐國高知城下本町ニ生ル

龍馬ノ父八平諱ハ直足母幸子谷氏格式ハ郷士ニシテ其長男權平直方ト云ヒ龍馬ハ卽チ其ノ二男ナリ

一嘉永四年辛亥正月土佐國幡多郡漁父萬次郎米國ヨリ歸朝シタルヲ以テ長崎奉行ヨリ土佐藩廳ニ引渡サル

萬次郎無人島ニ漂流シ米國漁獵船ニ救ハレ隨ヒ往テ米國ニ在ルコト十年普通教育ヲ受ケ米婦ヲ娶レリ當時高知ノ畫師ニ河田小龍ナル者アリ萬次郎ニ就キテ海外ノ事情ヲ聽取シ之ヲ圖畫ス藩廳及ビ土佐士民之レガ爲メニ初テ開國ノ思想ヲ萌芽スルニ至レリト云フ

（右河田小龍覺書ニ據ル）

一嘉永六年癸丑三月龍馬劍道修行ノ爲メ江戸ニ遊フ

龍馬發スルニ臨ミ父八平爲メニ左ノ訓戒ヲ與ヘタリ

一片時モ不忘忠孝修業專一ノ事

一諸道具ニ心ヲ移シ銀錢ヲ不費事

一色情ニウツリ國家ノ大事ヲ忘レ心得違アル間敷事

右三個條胸中ニ染メ修業ヲツミ目出度歸國專一ニ候以上

丑年三月吉旦　　老父㊞

龍馬殿

此年米艦渡來江戸人心洶々龍馬亦水戸人等ト交ルニ至レリ

一安政元年甲寅十一月土佐大地震高知城下火災アリ龍馬變ヲ聞キテ歸省シ河田小龍ニ會ス

是レヨリ先卽チ此年八月藩廳筒奉行池田獄藏砲術指南役田所左右次ヲ鹿兒島ニ遣ハシ反射爐ヲ視察セシム河田小龍其隨員タリ地震後小龍歸國シ舊宅燒失スルヲ以テ上町築屋鋪三丁目新越戸ニ寓ス坂本家本町ノ宅ト甚タ近シ龍馬卽チ往キテ薩藩ノ武備ノ狀ヲ聞キ日本刀ノミヲ以テ攘夷ノ効ヲ見ルヘキニアラサルヲ悟ル

一安政二年乙卯正月大里長次郎(後ニ上杉宗二郎)今井純成(後ニ長岡謙吉)寺内(後ニ新宮馬之助)等河田小龍ニ學ブ龍馬之ト交ヲ結ブ

一夕小龍從容トシテ龍馬ニ告ケテ曰ク今後ノ事ハ航海術ニ在リ自ラ金策シテ一汽船ヲ購ヒ運輸業ニ從事シ兼テ其術ヲ練習ス卽チ海軍ヲ興スノ端緒ナリト龍馬曰ク我レ他日必ス其ノ目的ヲ達セン唯人ナキニ苦ムト小龍曰ク何ソ其ノ人ナキヲ憂ヘント卽チ其ノ門ニ來リ學ブ平民ノ秀才ヲ皷舞ス

大里長次郎今井純成寺内馬之助等卽チ是レナリ當時長次郎ノ家ハ饅頭屋ニシテ寺内ノ家ハ燒繼屋ナリシト云フ

一安政二年乙卯九月龍馬再ビ江戸ニ遊ブ

同年十二月四日父八平本町ノ家ニ沒ス

一安政三年丙辰七月武市半平太勤番トシテ江戸ニ來ル

此年龍馬初テ武市ト交リヌ從弟澤邊琢磨カ事ヲ以テ罪セラレントスルヤ武市ト謀リテ藩邸ヲ脫セシムルノ事アリ

一安政四年丁未十一月藩主豐信大廣間諸侯ト連署建白幕議ニ反對ス

是レヨリ先卽チ九月中武市ハ祖母ノ病アルヲ聞キ土佐ニ歸ル

一安政五年戊午三月龍馬東海道諸藩ノ城下ヲ歷遊シテ土佐ニ歸ル

此月京師堂上八十八人參内堀田閣老ノ奏請ニ反對シ堀田空シク東歸ス

一安政五年戊午十月六日幕府伊達宗城ヲシテ藩主豐信ニ致仕ヲ諭示ス

同十一月二十二日ニ至リ豐信致仕ヲ幕府ニ請フ

一安政五年戊午十一月廿三日水戸藩士住谷寅之介大胡聿藏變名シテ土佐ノ國境立川ニ來リ藩情ヲ訴ントシ入ルヲ得ス龍馬往キ之ニ會ス

住谷寅之介日記ノ一節ニ曰ク

夕刻龍馬來ル寬話頗可愛人物也鄕士ニテ他國ノ比ニアラズ國中ヘ入候事色々周旋ノ處六箇敷弟依而態々來訪ス云々龍馬爲メニ頗ル江戸

ノ時勢ヲ知ルヲ得タリ

一萬延元年庚申三月三日幕府大老井伊直弼水戸十七士要擊ノ爲メ櫻田門外ニ斃ル

右警報高知城下ニ達スルヤ龍馬同志ニ向ヒテ曰ク我レ已ニ此變起ルヲ察セリ我ガ同志ノ國ニ盡ス此ノ如キノミト人始テ龍馬ノ大志ヲ抱クヲ知ル

一萬延元年庚申七月武市劍道試合ヲ名トシテ中國九州遊歷ノ途ニ上ル

當時龍馬之ヲ聞クヤ笑テ曰ク最早武者修行ノ時代ニ非スト未タ武市ノ目的實ハ時勢視察ニ在ルヲ知ラサリシナリ

一文久元年辛酉三月三日高知城外井口村及傷事件起ル龍馬ハ同志ト共ニ奔走盡力スル所アリ

上士ニテ劍客ノ名アル山田廣衞ナル者下士池田忠一郎ト途中衝突シテ殺サル池田ノ實兄寅之助警ヲ聞キ馳セ至リ不意ニ山田ヲ背後ヨリ斬リ倒シ更ニ其同行者上士松井繁齋ヲ殺シ從容弟ノ死體ヲ葬リテ後ニ割腹ス其間山田ノ親族來リ襲フノ報アリ龍馬同志池田ノ家ニ集會シテ之ニ聲援ス是レ高知城下ニ於ル上士ト下士ノ相軋轢セシ始ナリ

一文久元年辛酉七月武市江戸ニ至リテ水戸薩長ノ志士ニ交ル

是レ在江戸大石彌太郎カ時勢切迫ヲ報シ武市等ノ出府ヲ促カシニヨル而シテ龍馬ハ土佐ニ在リテ未タ起タサリシナリ

一文久元年辛酉九月武市大石等土佐同志ノ血誓書ヲ作リ歸國シ龍馬及ヒ各郡鄕士多ク之ニ加盟ス

是レ土佐勤王黨ノ開端ニシテ下士ノ之ニ應スル者忽チ數十名ノ多キニ達セリ

一文久元年辛酉十月十一日長藩士長嶺內藏太山縣範藏ハ久坂玄瑞ノ意ヲ受ケ土佐ニ來ルモ國境ヨリ入ルヲ得ス此日武市ハ龍馬ヲシテ往キ之ト應接セシムルヤ微行シテ之ヲ長州ニ送ル

一文久元年辛酉十一月龍馬長州ヨリ大坂ニ至リ繼テ歸國ス

望月清平陣營日記ニ曰ク

一文久元年十一月六日坂本龍馬旅宿新町ヨリ書狀來(小生宛)長州ヨリ來ル趣同十一日旅宿ニ訪ヒ面會

一文久二年壬戌正月上旬龍馬國境ヲ潛行シ同十四日長州萩城下ニ至ル武市ノ密囑ヲ受ルナリ

久坂玄瑞ノ日記ニ曰ク

十四日翳　土州坂本龍馬携武市書翰來托松洞夜前街ノ逆旅ニ宿セシム

十五日晴　龍馬來話午後文武修行館ヘ遣ス(下略)

一文久二年壬戌正月二十三日龍馬萩城下ヲ發ス久坂爲メニ武市宛ノ密書ヲ託ス

右密書中ノ要領ハ左ノ如シ

此度坂本君御出遊被爲在無腹藏御談合仕候事委曲御聞取奉願候竟ニ諸侯不足恃公卿不足恃草莽志士糾合義擧ノ外ニハ迚モ策無之事ト私共同志中申含居候事ニ御座候乍失敬尊藩モ弊藩モ滅亡シテモ大義ナレハ苦シカラス兩藩共ニ存シ候共恐多モ皇統綿々萬乘ノ君ノ御叡慮相貫不申而者神州ニ衣食スル甲斐ハ無之歟ト友人共申居候事ニ御座候就テハ坂本君ヘ御申談仕候事トモ篤ク御熟考可被下候尤モ沈密ヲ尊フハ申迄モ無之候樺山ヨリモ此内書狀來ル彼藩モ大ニ振申候ヨシ(下略)

(編者云樺山ハ卽チ武市等ノ同志薩藩ノ樺山三圓ナリ)

一文久二年壬戌二月八日龍馬大坂ニ至リ住吉陣營ノ同志安岡覺之助等ト會シ更ニ京師ニ至ル

當時島津久光將ニ兵ヲ率キテ鹿兒島ヲ發シ上京セントシ平野二郎等其機ニ乘シテ義擧ヲ企ツ故ニ龍馬ハ其ノ形勢視察ノ爲メニ上國ノ間

ヲ奔走シタルナリ

一文久二年壬戌三月朔日龍馬高知ニ歸著シ武市ニ報告スル所アリ

此日龍馬平野二郎義舉ノ計畫及ヒ上國ノ形勢ヲ告ケ藩論ノ如何ヲ問フ武市大息シテ曰ク今尚ホ盡力中ナリト龍馬頗ル失望ス

一文久二年壬戌三月四日吉村寅太郎宮地宜藏澤村綏之丞前後相繼キテ脫藩ス

是レ土佐人脫藩ノ始メニシテ澤村ハ遂ニ海援隊中ノ一領袖タリ

一文久二年壬戌三月二十四日龍馬遂ニ脫藩ス

是ヨリ先キ澤村ハ吉村ノ囑ヲ受ケ上國ノ形勢ヲ武市ニ報セン爲メ潛行シテ高知ニ歸リ深夜武市ノ門ヲ叩ク武市之ヲ屏中ニ匿クス偶々龍馬來リテ之ヲ聞キ心動ク遂ニ澤村ト相携ヘテ脫藩スルニ至ル

一文久二年壬戌四月朔日龍馬ハ澤村ト共ニ下關白石正一郎ノ家ニ達ス翌二日澤村ト東西ニ手ヲ分チ九州遊歷ノ途ニ就ク

此日龍馬ハ島津久光已ニ汽船ニテ東上セルヲ聞キ義舉ニ投スルノ機ヲ失スルヲ悟リ澤村ト東西ニ手ヲ分チタリト云フ

爾來數十日ハ龍馬ノ消息ヲ傳ヘズ唯薩藩ニ入ラントシテ關吏ニ拒マレ空シク踵ヲ返シテ東上シタルヲ知ルノミ其ノ豐筑肥ヲ經過スル間ニ志士ニ會セシモノアランモ未タ之ヲ探知スルノ端緒ヲ得サルナリ

一文久二年壬戌六月十一日龍馬大坂ニ至リ澤村ヲ京師ヨリ迎ヘ又一書ヲ住吉陣營ノ望月清平ニ投ス戒心アルヤヲ以テ更ニ京師ニ入ル

當時澤村ハ京師河鰭家ノ青侍トナリ朝廷ノ動靜ヲ探リ大河原刑部ト變名ス又望月清平ハ龍馬ノ書ヲ得テ大ニ驚キ田中作吾ヲ龍馬ノ旅宿ニ遣ハシ之ニ告ケテ曰ク去ル四月八日ノ夜高知城下ニ於テ參政吉田元吉暗殺セラレ御身ニモ亦刺客ノ嫌疑カヽレリ速ニ捕吏ヲ避ケヨト龍馬卽時入京シ偶々江戸ヨリ歸國ノ途ニ在ル大石彌太郎ニ邂逅ス龍馬窮スルコト甚シク刀柄ノ緣頭ヲ賣リ手拭ヲ以テ之ヲ卷キ居リシト

一文久二年壬戌八月(日不詳)龍馬京師ヲ發シ江戸ニ下ル

龍馬ノ江戸ニ著スルヤ桶町千葉重太郎ノ家ニ投ス

當時間崎哲馬七律ノ詩ノ小引ニ「壬戌秋日與門田爲之助坂本龍馬上田楠次會飲」トアリ

一文久二年壬戌十月龍馬千葉重太郎ト共ニ勝安房守義邦ヲ訪ヒ初テ勝ノ門弟トナル

土佐勤王史ニ曰ク

坂本ハ吳服橋ノ越前邸ニ推參シテ春嶽ニ謁ヲ請ヒシ事アリ或ハ大久保一翁(卽チ越中守忠寛)ヲ訪ヒ攘夷ニ對スル意見ヲ質ス又彼ノ勝麟太郎海州ガ頻ニ開國說ヲ主張シ肥後ノ横井平四郎ト共ニ攘夷ノ空論ナルヲ嘲笑スルヲ聞キ込ミ千葉ニ謀ルラク彼ハ果シテ世評ノ如ク奸物ナリヤ一タビ之ニ對面シテ其ノ議論ヲ試ミシ上事宜ニヨリテハ卽座ニ天誅ヲ加フヘシト千葉ヲ伴ヒテ勝ノ許ヲ訪問セリ流石ニ勝ハ夫レト悟リテ先ツ初對面ノ挨拶ニ兩君ノ御入來ハ拙者ヲ刺ン爲メナラヘイヤ御隱シアルトモ殺氣ハ眉宇ニ見ハレ居ル拙者モ敢テ御相手ヲ辭スル者ニアラズ先ツ我ガ滿腔ノ議論ヲ聞カレヨ然ル後ニ立合ヒ申サント智辯湧クガ如ク滔々トシテ歐洲兵制ノ沿革ヨリ海軍ノ武力到底封建的大名ノ抗シ得ラルヘクモアラス事實ヲ最モ精巧ニ說明シケレバ坂本ハ爲メニ醉エルカ如キニ感服シ謹ンデ今ヨリ先生ノ御指導ヲ蒙リ誓ヒテ日本ノ海軍ヲ起スヘシト云ヒケレハ勝モ深ク其ノ無我ノ頓悟ヲ奇トシ玆ニ坂本ハ土佐勤王黨中唯一ノ開國家トハナリニケル

一文久二年壬戌十一月(日未詳)龍馬ハ近藤長次郎ヲ介シテ勝ニ入門セシム

是レヨリ先キ萬延元年中長次郎ハ江戸ニ遊ヒ安積艮齋ノ門ニ入ルモ更ニ洋書ヲ手塚某ニ學ヒ又高橋秋帆ニ砲術ヲ學フ蕃廳亦其志ヲ賞シ金穀ヲ給與シ帶刀ヲ許サル偶々龍馬ノ東下スルヲ聞キ大ニ喜ヒテ來リ訪フ龍馬自ラ介シテ之ヲ勝ニ入門セシム